

2019年4月1日

みずほディーラーズアイ (2019年4月号)

みずほ銀行

目次

米ドル相場	2	韓国ウォン相場	9
ユーロ相場	4	台湾ドル相場	10
英ポンド相場	6	香港ドル相場	11
豪ドル相場	7	中国人民元相場	12
カナダドル相場	8	シンガポールドル相場	13
		タイバーツ相場	14
		マレーシアリング相場	15
		インドネシアルピア相場	16
		フィリピンペソ相場	17
		インドルピー相場	18

* 見通しは各ディーラーのビューに基づきます。

当資料は情報提供のみを目的として作成したものであり、特定の取引の勧誘を目的としたものではありません。当資料は信頼できると判断した情報に基づいて作成されていますが、その正確性、確実性を保証するものではありません。ここに記載された内容は事前連絡なしに変更されることもあります。投資に関する最終決定は、お客様ご自身の判断でなさるようお願い申し上げます。また、当資料の著作権はみずほ銀行に属し、その目的を問わず無断で引用または複製することを禁じます。なお、当行は本情報を無償でのみ提供しております。当行からの無償の情報提供を望まれない場合、配信停止を希望する旨をお申し出ください。

米ドル相場

予想レンジ: USD/JPY 108.00 ~ 112.50

国際為替部 為替営業第二チーム 藤巻 龍太郎

■ 先月の為替相場

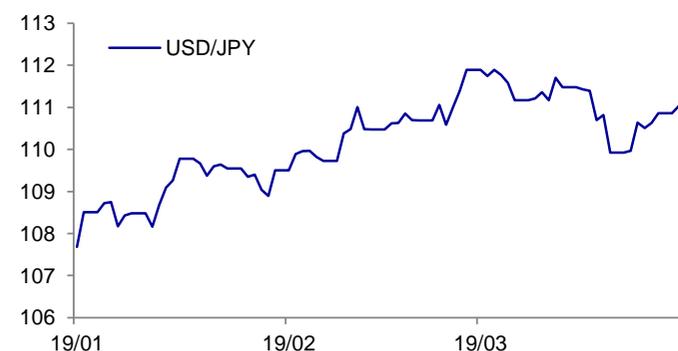
3月1日は、ドル/円は堅調に推移し一時112円まで上昇。4日は「米中通商合意が近い」と伝わる中で112円台へ。しかし、NYダウ平均株価に売りが入る中111円台半ばまで下落。5日は米2月ISM非製造業指数が予想を上回り一時112.13円をつけ年初来高値を更新するも利益確定売りが入り111円台まで下落。6日は中国株高を受け112円手前まで上昇するも、米12月貿易統計での輸出鈍化を嫌気し株式市場が下落する中111円台半ばまで下落。7日はECBがフォワードガイダンスを修正したことや、期間2年の貸出条件付き長期資金供給オペ(TLTRO)の第3弾を9月から実施すると発表する中、ユーロ/円が下落し111.48円へ。翌8日についても前日と同様に軟調な推移となった。11日は米1月小売売上高が予想を上回ったことから底堅く推移。12日はポンド/ドルが上昇する中、ドル/円は111円台前半まで反落。13日は合意なきブレグジット是非の採決を前に否決されるとの期待からドル/円は111円台前半まで売られる展開。14日は前日の英議会で合意なきブレグジットを回避する案が可決となったことでEU離脱問題への懸念が和らぎドル/円は上昇。その後米金利が上昇する動きにドル買い優勢となった。15日については、週末を控えたポジション調整が入り小幅に下落。18日は、日経平均株価が堅調に推移したことから円が売られるも、米国株が下落する中、ドル/円も111円台前半まで下落。19日は米中通商協議で合意に向けた協議の進展は鈍いと報じられると111円台前半まで下落。20日は五・十日のドル買いフローを受けて一時111.70円をつけたが、FOMCで年内の利上げを見送る見通しが示され予想以上にハト派との見方が広がり110円台まで急落。21日は前日の流れを引き継ぎ一時110.30円をつけたが、その後は良好な指標等を背景に111円台手前まで値を戻した。22日は、欧州圏の弱い経済指標を背景にグローバルなリスクオフムードが高まる中、ドル/円は110円割れ。25日は目立った材料がない中、狭いレンジでの推移となった。26日は米2月住宅着工件数が予想を下回り下押しする場面も見られたが、ユーロ/ドルが下落する動きに110円台後半まで上伸。27日は本邦企業の年度末のレパトリの動きと見られる円買いが優勢となり110円台前半まで反落したが、米金利が下げ渋る展開に110円台半ばまで回復。28日は米中通商協議を巡る楽観的な見方が拡がり上昇。その後は、米2月中古住宅販売仮契約が予想を下回り堅調に推移していた株式市場が上げ幅を縮小する動きに110円台半ばまで下落。29日は、月末のフローが混在する中、方好感のない展開となった。

■ 今月の見通し

先月のドル/円相場は、前半は米中関係の改善期待、グローバルに中央銀行がハト派にシフトする中、株やエマージング市場が堅調に推移する中、ドル/円は一時112円を超える水準まで上昇。然しながら、後半については、米中関係に進展が見られないことや、FRBがFOMCにおいて年内は利上げをしない見通しを示す中ドル売りとなり、ドル/円は下落した。今月のドル/円相場については、基本的には上値重いながらも下落幅も限定的となるレンジでの推移を想定している。ドル/円の上値が重い主因としては、FRBが利上げをギブアップしたことが一番大きいのではないかと考えている。FRBは昨年12月の株急落以降、バランスシートを従来の想定よりも大きめにするという、過剰流動性相場の継続姿勢を打ち出しつつも、利上げの見通しを示していたことから、株が上昇する一方で緩やかな利上げによる日米金利差拡大の可能性があったため、ドル/円は上昇する可能性もあった。しかしながら、前回のFOMCで利上げの可能性が大きく後退する中、たとえ株などリスク資産が上昇しても、日米金利差の拡大がないため、積極的にドルを買う環境ではない。そういった意味で、ドル/円は、円売りに依存することから、大きな上昇は見込めないのではないだろうか。但し、期待感が継続するも具体的な進展がない米中貿易交渉で、トランプ大統領と習近平国家主席が直接会い、何らか合意する場合においては、リスクオンで株やエマージングなどリスク資産は大きく上昇する可能性があり、そういった場合は円売りが加速し112円を上回るようなドル/円の上昇が見込めるかもしれない。一方で、下値も限定的と考える理由としては、金利市場であまり悲観的な見通しを既に織り込んでいることがあげられる。足許米短期金利市場では、FRBの想定から大きく逸脱し、年1回以上の利下げを織り込んでいる。ここからすぐに利上げを織り込むような状況ではないが、現状分かっている材料でさすがにこの利下げ織込みは少し違和感を覚える。そういった意味で、金利低下方向の調整が相応に進んでいることを考えると、ドルを一段と売るという環境ではないのではないだろうか。よって、下値も限定的であることから、結局110円を中心に上下2円程度の動きになるのではないかと考えている。また、FRBがハト派になる中、米国の実体経済の状況がより重要となるのではないかと考えており、これまで以上に経済指標などファンダメンタルズの動きに注目があつまるのではないだろうか。

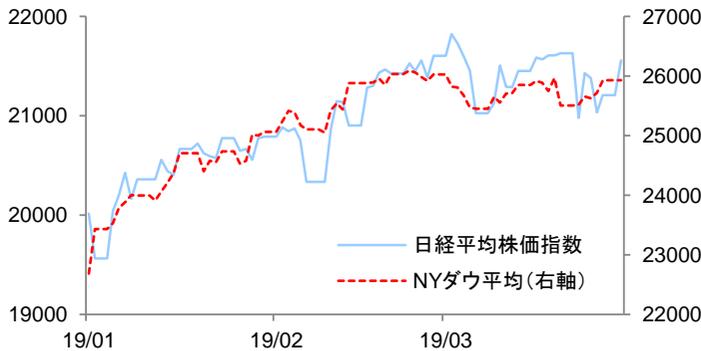
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーグ



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーグ



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーグ

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
3/1	PCEコア(前年比)	12月	1.90%	1.90%	1.90%
3/1	ISM製造業景況指数	2月	55.8	54.2	56.6
3/5	ISM非製造業指数	2月	57.4	59.7	56.7
3/8	非農業部門雇用者数変化	2月	180k	20k	304k
3/8	失業率	2月	3.90%	3.80%	4.00%
3/8	平均時給(前月比)	2月	0.30%	0.40%	0.10%
3/11	小売売上高速報(前月比)	1月	0.00%	0.20%	-1.20%
3/12	CPI(前月比)	2月	0.20%	0.20%	0.00%
3/15	ミシガン大学消費者マインド*	3月	95.6	97.8	93.8

カスタマーディーラーの相場観、注目点(本編の内容とは必ずしも一致しません)

■ドル・ブル(0名)

■ドル・ベア(10名、106.50~113.00、中心107.50~112.00)

田内	107.00 ~ 112.00	米FRBによる景気懸念のハト派強化はドルにとって重石となり、政治・経済情勢の先行き不透明感が漂う中ではドルを積極的に買い進め難い。米中通商協議進展に対する期待があがる一方、トランプ米大統領がディールを急ぐとは考え難く、予断を許さない状況は続くとする。
加藤	107.00 ~ 112.00	米国の通貨通商政策、ピーク近傍にあると思われる景気、そして日米金利差に鑑み、2019年度は105-115の大きなレンジの下値を試す展開となりそうである。
関	109.00 ~ 112.00	ドル買いをサポートする材料に乏しくドル円は下落を見込む。グローバルな景気減速懸念が高まっており、各国中銀はハト派寄りに傾斜。実態よりも弱気になり過ぎている印象だが、景気見通しがこのまま引き下げられれば、リスクオフの動きに米株の高値維持も厳しくなってくるのでは。
光石	108.00 ~ 113.00	先月のFOMCにおいてハト派寄りの姿勢が示されたことや米中貿易協議の次に日米交渉が控えていることを勘案すると、ドル円の上値は重い展開を予想している。ブレグジットやトルコ問題等を受けリスク回避姿勢が高まる際の急激な円高の動きには注意したい。
藤巻	108.00 ~ 112.50	レンジでの推移を想定。利上げの可能性が大きく後退する中、米ドルを積極的に購入する材料はない。一方で、金利は相応に調整し下がっており、ここから一段と金利主導でドル円が下がる展開も想定できない。米中交渉に注目も基本はレンジ推移。
岡本	106.50 ~ 112.00	米中通商協議は難航、米経済はソフト・ハードデータともに弱く、ついにFRBも正常化プロセスの終焉を宣言。グローバルな景気後退局面入りが懸念される状況で、株などリスク資産が崩れる場面ではリスクオフの円買いが広がりやすいだろう。
上野	107.00 ~ 112.00	世界的な経済鈍化や、米中協議やブレグジットなどの進展が見えない状況において、引続きリスクは下方向だと考える。その中で4月末には本邦が10連休を迎える。流動性が低下する中で年始のような急激な動きにも警戒すべきだろう。
玉井	108.00 ~ 112.50	3月のFOMCにおいてFRBのハト派姿勢が示され金利が大きく低下する中、ドルは買いづらい状況が続くであろう。ただ他通貨も弱含む中、米国の経済指標は未だ強弱入り混じっており、結果的にドルは支えられ下値は限定的と予想する。
森谷	108.00 ~ 112.00	3月FOMCのハト派な結果を受けて、利下げ観測が次第に高まっている状況。各国中銀の相次ぐハト派シフトを受け株価は支えられているものの、グローバルに高まりつつある景気停滞懸念も意識される中、円売り圧力も次第に弱まる展開を予想する。
大熊	107.00 ~ 112.00	FRBのハト派姿勢が鮮明となったことで、市場では年内の利下げ観測も目立ち始め、米長期金利が低下している。他国と比較して米経済は未だ底堅いものの、米中通商協議への期待の低下等、ドルの積極的な買い材料に乏しく、上値重い推移を予想する。

ユーロ相場

予想レンジ: EUR/USD 1.1100 ~ 1.1400
EUR/JPY 122.00 ~ 126.00

国際為替部 為替営業第二チーム 森谷 友一

■ 先月の為替相場

先月のユーロ相場は上昇する展開となった。月初1日に1.13台後半でオープンすると、弱い米経済指標の結果を受けてドル売りが強まり1.14台まで上昇するも、すぐに1.13台まで反落。4日はECB政策理事会へ向けて売り意欲強く、1.13台前半まで下落した。5日は米2月ISM非製造業指数が市場予想を上回り1.12台後半まで下落も、同水準では買い意欲も見られ1.13台へ反発。6日は「ECBが成長やインフレ見通しを下方修正し新規のTLTROの導入を議論する」との報道が伝わり1.12台後半まで急落。7日のECB理事会では、新TLTROの導入に加えて、フォワードガイダンスを変更して年内の利上げを撤回するハト派な結果に1.13割れ。その後、GDP成長率とインフレ見通しが大幅に引下げられたことや、ドラギECB総裁会見でのハト派発言を受け一時月安値となる1.1177まで大幅下落した。8日は米2月雇用統計が市場予想を下回ったこともあり1.12台半ばまで反発。11日はBrexitに関し英議会での離脱案採決を前に進展があるのではとの期待からポンド/ドルが上昇したことに連れ、1.12台半ばまで小幅上昇。12日、米2月CPIの弱い結果を受けドル売りが進む中、一時1.13台をつけた。13日はメイ首相が英国のEU離脱に関して、離脱期限の2か月間延長を求めるとの報道を受けポンドが上昇すると、ユーロも連れて1.13台前半まで上昇。14日はBrexitに関し具体的な延長期限が明らかにならなかったことから、1.1300近辺まで下落。15日は軟調な米経済指標の結果を受けドルが売られる展開となり1.13台半ばまで上昇した。18日～19日にかけては週半ばにFOMCが控えることから全体的に様子見姿勢が強く、1.13台でのみ合い。20日は事前予想を上回るハト色の強いFOMCにドル全面安の展開となる一時月高値となる1.1448まで急騰。21日米経済指標が市場予想比強い結果となるとドル買いの流れに1.13台まで下落。22日、フランス・ドイツ・ユーロ圏の製造業PMI速報値が軒並み市場予想を下回ったことから、1.12台後半まで大幅下落。25日は独3月Ifo企業景況感指数が予想を上回り景気後退懸念が緩和したことから1.13台前半まで上昇も、トランプ大統領のゴラン高原についての宣言を受け伸び悩んだ。26日は翌日の英国の「示唆的投票」を控えユーロ売りポンド買いが強まったことから1.12台後半まで下落した。27日はドラギECB総裁が必要ならば利上げを更に遅らせる用意があると述べたこと等から1.12台前半まで下落。28日は独3月消費者物価指数が弱めであったことから1.12台前半での上値の重い推移が継続。29日は英議会でメイ首相の離脱案が3度目の否決となったことから上値の重い推移が続き1.12台前半でクローズした。

■ 今月の見通し

今月のユーロ相場は上値の重い推移を予想する。

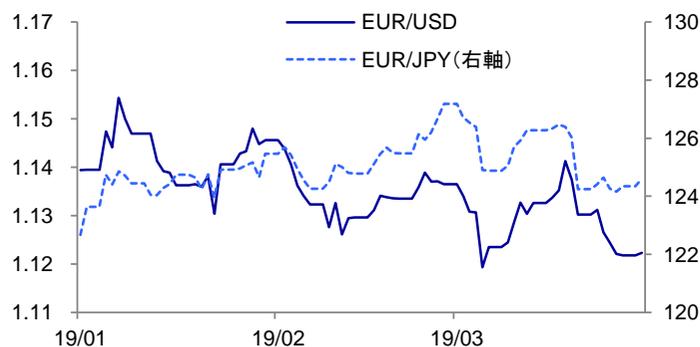
今月は10日にECB理事会が開催される。先月7日に開催されたECB理事会では、市場予想通り政策金利は据え置かれたが、声明文においてフォワードガイダンスが修正されたことやターゲット型長期流動性供給第三弾(TLTRO3)の実施方針が示された。フォワードガイダンスについてはこれまで、現行の政策金利について「少なくとも2019年夏までは」据え置くこととされてきたが、「少なくとも2019年末まで」に修正。もともと市場においてはECBに対する年内利上げ期待は大きく後退している状況であったとはいえ、このタイミングでTLTRO3の実施方針が示されたことは予想外であり、スタッフ見通しも大幅に下方修正されたことも併せると、市場の想定よりもハト派な結果となったと言えるだろう。理事会後もドラギ総裁や関係者からハト派発言が続いていることを勘案すると、今月会合も今後の金融政策に対する慎重なトーンが表明される可能性が高そう。引き続きECBのハト派スタンスはユーロの上値を抑える要因として意識されることとなりそうだ。

一方で、米国の金融政策について目を向けると、先月開催されたFOMCでは、FOMCメンバーによる政策金利見直し(ドットチャート)の年内利上げ回数が2回からゼロ回に下方修正されたことに加え、9月にバランスシートの縮小を終了することを発表するなど、総じてハト派な内容となった。マーケットにおいては利下げを織り込む動きも進んでおり、ドル売りが進む局面は今後見られやすくなるかと考えており、その場合は相対的にユーロ相場を下支えする要因となり得るだろう。ECB、FRBともにハト派シフトが鮮明になりつつある状況ではあるものの、足元の経済指標についてはユーロ圏の方が落込みが目立っていることに加え、ECB関係者の話としてマイナス金利の副作用を軽減する措置を検討しているとも報じられており、一段のハト派シフト観測が高まりやすいのはECBであると思われ、ユーロ売り圧力がドル売り圧力を上回る展開を予想する。

また、英国のEU離脱を巡る問題では3月29日に英議会が離脱協定案につき3度目の採決を実施したが、反対多数で否決。この結果を受けて4月12日の合意なき離脱懸念が高まっている状況であり、引き続きBrexitを巡る動向がユーロ相場の重石となりそうだ。

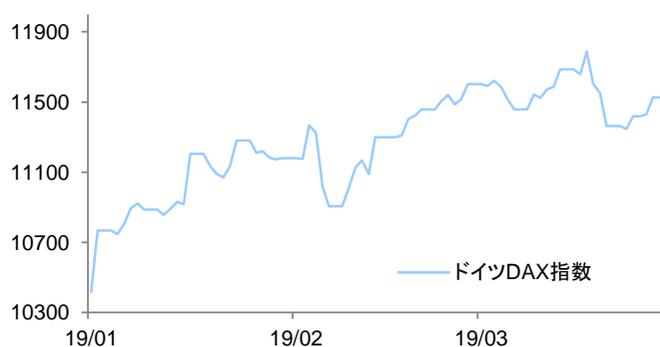
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
3/1	マーケット 1-1000製造業PMI	2月	49.2	49.3	50.5
3/5	マーケット 1-1000サービス業PMI	2月	52.3	52.8	51.2
3/7	1-1000GDP(前期比/前年比)	4Q	0.2%/1.2%	0.2%/1.1%	0.2%/1.2%
3/7	ECB主要政策金利	3月	0.000%	0.000%	0.000%
3/8	独製造業受注(前月比)	1月	0.5%	-2.6%	0.9%
3/11	独鉱工業生産(前月比)	1月	0.5%	-0.8%	0.8%
3/14	独CPI(前月比/前年比)	2月	0.5/1.6	0.4/1.5	0.5/1.6
3/19	独ZEW指数(現状/期待)	3月	13.0/-11.0	11.1/-3.6	15.0/-13.4
3/22	マーケット 1-1000製造業PMI	3月	49.5	47.6	49.3
3/26	独IFO企業景況感指数	3月	98.5	99.6	98.7

カスタマーディーラーの相場観、注目点(本編の内容とは必ずしも一致しません)

■ ユーロ・ブル (2名、1.1100~1.1500、中心1.1150~1.1450)

加藤	1.1100 ~ 1.1500	元来利上げに期待する向きも多くなかった上に、ユーロ圏全体としての貿易黒字は維持される。また政治イベントが鳴りを潜めていることから対ドルで若干ユーロが強含むことを予想する。
藤巻	1.1200 ~ 1.1400	方向感のない展開を想定。欧州圏の景気環境については芳しくない状況が継続しており、ECBもハト派姿勢を出してきている。一方で、様々悲観的な内容が確認されているにも関わらず底堅い。リスクはショートポジションのアンワインドによる上昇か。

■ ユーロ・ベア (8名、1.0500~1.4000、中心1.1100~1.1400)

田内	1.1100 ~ 1.1500	明るい兆しが全く見えないユーロ圏政治・経済情勢。ユーロ圏の経済見通しに対するリスクは依然として景気下振れ方向にあり、ドラギECB総裁からもインフレの回復は遅れるとの認識が示される中、マイナス金利を含む緩和的な金融政策継続からも、ユーロは伸び悩み展開を見込む。
関	1.1100 ~ 1.1400	ドル・ユーロ双方に買い材料が無い中で、方向感無い動きを想定。ECBがハト派姿勢に転じ、米中対立の影響をによる景気減速、ブレグジットや欧州各国の政治混迷が重なっている事から、どちらかと言えばユーロが劣勢か。
光石	1.1100 ~ 1.1400	今月のECB政策理事会で緩和継続が決定される等足許のユーロ圏の経済状況は下方リスクを抱えている状況。加えて、ブレグジットやトルコ問題等の懸念事項もあり、引き続きユーロの上値は重いものと考えている
岡本	1.0500 ~ 1.1400	ECBも正常化プロセスを中断。ユーロ圏の指標は景況感中心に弱く良い材料ないため、ハト派な中銀スタンスはむしろファンダメンタルズの弱さを意識させる。ドル・ユーロどちらにも積極的に買う材料ないが、金融政策格差やBrexitの影響に鑑みるとユーロの方が弱含むやすいか。
上野	1.1000 ~ 1.1300	経済状況も、ブレグジットも混迷の中にある。ユーロが強含むとすれば、消去法的な選好だと思うが、米ドルならびに円に対してそのような状況になる展開は現時点では想定できない。引続き、ユーロは種々の爆弾を抱える中でリスクは下方向だと考えている。
玉井	1.1000 ~ 1.1400	経済指標の悪化、急激な金利低下、ブレグジットを巡る不透明感等、ユーロ圏の先行きは不安要素が多い。またECBがハト派化したこともユーロの重しとなるであろう。ユーロ圏の景況感がすぐに改善するとは思えず、軟調な展開を予想する。
森谷	1.1100 ~ 1.1400	3月ECB政策理事会では利上げ時期の先送りを表明したが、足元の弱い結果を受けて更なるハト派化も想定される状況。ブレグジットを巡る先行き不透明感も引き続き残る中、ユーロを買う動きは控えられやすいだろう。
大熊	1.1100 ~ 1.1450	各国中銀がハト派化し、世界の景気後退懸念が強まるリスクオフの状況下、トルコを始めとする新興国不安や先行き不透明なBrexit問題等が欧州経済の重石となり、ユーロは弱含む展開を予想する。

英ポンド相場

予想レンジ: GBP/USD 1.2500 ~ 1.3700
 GBP/JPY 136.00 ~ 152.00

■ 先月の為替相場

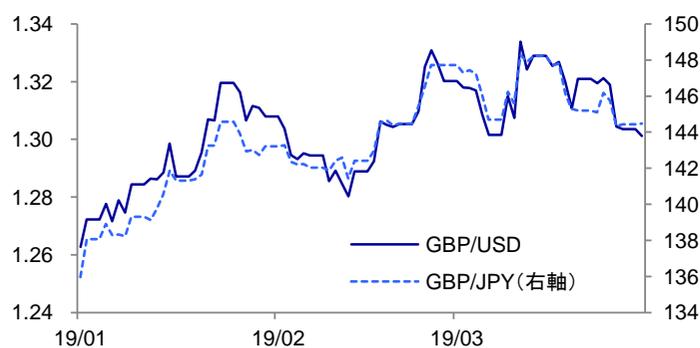
英ポンド相場は3月、英EU離脱期限延長を巡るヘッドラインに振り回された。2月26日にメイ首相は3つのコミットメント(①今年1月に1度否決されたメイ首相の離脱案を支持するか、3月12日までに2度目の投票を実施、②それが不支持ならば3月13日に合意なき離脱を支持するか投票、③それが不支持ならば3月14日に離脱期限延長を支持するか投票)を表明した。一貫して離脱期限延長を否定してきたメイ首相の態度軟化でポンドは強含み、3月1日の英ポンドは1.32台でオープン。翌週4日からは一転、弱含み。5日は、コックス英法務長官、パークレイ離脱担当相がブリュッセルでEUとの交渉を再開するも、「交渉での進展は見込めない」とのヘッドラインでポンド安。7日のECB理事会では、欧州経済・インフレ予想の大幅引き下げ、フォワードガイダンスの変更、TLTRO3の導入決定など、市場予想以上のハト派な結果にユーロが急落、ポンドも連れ安。翌8日は、中国貿易収支悪化を背景に株安、外部要因も向かい風となり、調整が継続した。翌週はブレグジット関連のヘッドラインで乱高下。11日は、翌12日の投票が暫定的投票へ格下げされるとの報道から月中安値1.2945まで安値を切り下げたも、後に否定された。その後、メイ首相が急遽、コンケル欧州委員長とトップ会談をするとの報道で、交渉進展期待から反発。12日、コックス英法務長官が修正離脱案の法的リスクについて言及するとポンドは反落。前述の投票は否決されたものの、市場は14日までの投票実施を織り込んでおり、反応は限定的。13日は、英政府が合意なき離脱に備える関税撤廃案を発表したことに加え、合意なき離脱回避案が可決、ポンドは月中高値1.3380まで上昇。14日のEU離脱期限延長案も、予想通り可決。焦点は延長期間へ切り替わり、ポンドは膠着ムードへ。翌週20日、メイ首相がEUトウスク大統領に書簡を送付、6月30日までの延長を要請。しかし、短期間の延長にポンドは下値を探る展開。21日はEUサミットのヘッドラインが錯綜。結局、EUは、メイ首相案が英議会を通過できた場合において、5月22日までの離脱期限延長を認めた。また、議会を通過できない場合の離脱期限は4月12日へ後倒しされた。翌週25日、メイ首相は3度目の修正離脱案採決について、十分な支持が得られていないとして、実施の先送りを発表。その後、議会ではEU離脱プロセスの主導権をメイ首相から議会へ移すこととなる示唆的投票を議会が実施する案が可決。この投票は27日に実施予定も、法的拘束力はなく、メイ首相は投票結果の実行を約束できないと徹底抗戦の構え。26日は、離脱強硬派の一部が、メイ首相の離脱案支持を示唆したことを材料に底堅く推移、1.32近辺で引けた。

■ 今月の見通し

先月同様、4月のポンド相場は無論、ブレグジット交渉の行方次第であろう。3月5日、BOEカーニー総裁は、「市場の利上げ織り込みは十分ではないかもしれない」とコメントするも、ポンドの買いは続かず、関心がブレグジット交渉に集まっていることを再度印象付けた。また、3月23日には、ロンドンでは2度目の国民投票を求める100万人規模のデモが行われたほか、ブレグジット中止を求める嘆願書の署名は530万人を超えるなど、市場だけでなく、英国国民の関心も一段と高まっている。本稿執筆日(3月26日)以降の予定として、27日に左記、示唆的投票が実施される。詳細については言及されていないが、合意なき離脱、メイ首相の離脱案、2回目の国民投票、リスボン条約50条発動(ブレグジット)の撤回などの選択肢から、英議会が何を希望するかが問われることになる。ただし、先述の通り、この投票に法的拘束力はなく、メイ政権がその結果を実行しない可能性は排除できない。不透明感が払拭されなければ、市場は嫌気し、ポンドの重石となるだろう。一方、メイ首相は、3度目の離脱案採決を検討している。離脱推進派の支持を取り付け、可決することができれば、不透明感の払拭、ポンド買い材料となるか。しかし、現状では、民主統一党(DUP)、ヨーロッパリサーチグループ(ERG)の強硬離脱派との距離感は埋まっておらず、過半数の支持獲得の目途は立っていない。3月25日には、「私の合意に賛成すれば辞任する」といった、メイ首相の辞任を巡る多くのヘッドラインが行き交ったほか、複数の英紙が「メイ首相を首相職から排除、暫定首相を置くための処置を講じつつある」と報じるなど、混迷を極めている。3回目の離脱案採決でも否決されることになれば、メイ首相の辞任、総選挙の思惑から、初動はポンド安になるだろう。また、メイ政権は3月29日までの採決を目指してはいるものの、29日までに実施しなくてはならないとの理解ではないとも表明しており、4月へ連れ込む可能性も想定しておくべきか。その場合は、あらためて4月12日の離脱期限が意識されることとなり、ポンド安を想起しそうだ。その他要因に目を向けると、世界的な金利低下が顕著である。ECB、FRBが立て続けにハト派スタンスへ舵を切る中、米10年金利は2017年12月以来の一時2.4%割れ、独10年金利は2016年10月以来のマイナス金利突入。世界的な景気減速懸念が顕著に見て取れるだけに、先月上旬のような、外部要因によるポンド変動にも留意したい。

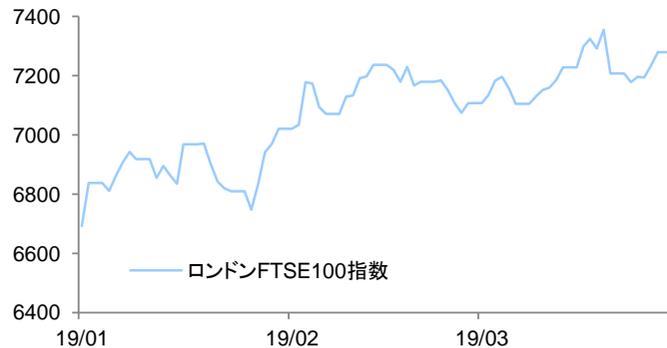
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
3/1	製造業PMI	2月	52.0	52.0	52.6
3/4	建設業PMI	2月	50.5	49.5	50.6
3/5	サービス業PMI	2月	49.9	51.3	50.1
3/12	鉱工業生産(前年比)	1月	-1.3%	-0.9%	-0.9%
3/12	製造業生産(前年比)	1月	-1.9%	-1.1%	-2.1%
3/19	ILO失業率	1月	4.0%	3.9%	4.0%
3/20	消費者物価指数(前年比)	2月	+1.8%	+1.9%	+1.8%
3/21	小売売上高(含自動車/前年比)	2月	+3.3%	+4.0%	+4.1%
3/21	英中銀政策金利		+0.75%	+0.75%	+0.75%

豪ドル相場

予想レンジ: AUD/USD 0.6950 ~ 0.7250
AUD/JPY 77.50 ~ 80.50

アジア・オセアニア資金部 シドニー室 原田 直彦

■ 先月の為替相場

先月の豪ドルは、0.71を中心として上下する展開となった。0.71近辺で3月を迎えた豪ドルは、4日発表となった豪10～12月期企業利益が予想以上に悪化したことを受け月初は0.70台後半で上値の重い値動きとなった。5日の豪州準備銀行(RBA)理事会は、市場予想通り政策金利を1.50%に据え置き、声明では豪経済が2018年下期に減速した可能性を認めた上で、企業投資や堅調な労働市場を理由に2019年の実質GDP成長率は3%前後・インフレ率は2%の予想を維持との内容で市場の反応は限定的。翌6日に、発表された豪10～12月期実質GDPが予想を下回り、市場の利下げ観測が高まると、豪ドルは1月以来の安値0.70台前半まで急落した。8日には予想を下回る中国貿易統計を嫌気し、豪ドルは再び下値をトライして週安値となる0.7003をつけるも、このレベルでの取引は長続きせず、月後半にかけては徐々に上昇する展開となった。

中旬、12日は、豪2月NAB企業景況感指数が、+4と前回の+7から低下したことから一時0.7058まで下落する場面もあるも、底堅い動き。弱めの米2月CPIから米金利が低下すると、ドル売りの流れから豪ドルは上昇し一時0.7092まで上昇した。13日、海外時間に、英議会在採決で合意なき欧州連合(EU)離脱を退けたことを受け離脱延期への期待が高まったことからポンドが上昇。豪ドルも0.7098まで上昇した。その後、中国経済指標が総じて減速したことや米中首脳会談が4月になる公算が大きいとの報道等を受け、0.7042まで下落する場面もあったものの0.70台後半で堅調に推移した。

20日のFOMCでは、予想よりもハト派との見方から全般的にドル売りとなる中で豪ドルも上昇し、0.7150近辺まで上昇した。その後は0.71台前半まで押し戻されたが、21日にRBAが今後の経済動向を占ううえで重要としている豪2月失業率が強めの内容となると、豪ドルは0.7160近辺まで上昇し、3月の高値をつけた。その後は全般的にドルが買い戻される動きのなかで、豪ドルも0.70台へ下落。26日、豪州、米国ともに金利が大きく低下し特に米国での利下げ観測が一段と高まると豪ドルは0.71台半ばまで上昇したものの、27日ニュージーランド準備銀行(RBNZ)の「次の動きは引下げ方向となる可能性の方が大きい」とのコメントからニュージーランドドルが売られると豪ドルも連れで0.71ちょうど近辺まで下落した。

■ 今月の見通し

4月の豪ドルは、0.71台を中心としてレンジ内での動きを予想。豪州経済については、住宅市場、個人消費の軟化等が徐々に顕現化しており、先行きの不透明感が高まっている。金融政策は、豪州でも昨年末以降急速に利下げを織り込みはじめ、金利市場では年内に1回以上の利下げを既に織り込んでいるが、豪ドルは、利下げ観測にも係らず、0.70台で揉み合う展開と、方向感の出づらいつながり状況が継続している。3月のRBA、およびロウ総裁の講演においては、景気の鈍化傾向を認めながらも、失業率が低下していることのポジティブ面を材料に、政策金利については「かなり均等にバランス」との認識が示された。実際に先月発表された豪10～12月期GDPについては減速を示す内容となっている一方で、失業率については若干の改善との結果となっており、市場と中銀の見方のギャップがどのような形で埋まってくるのについて注目が集まる。

足元の豪ドルについては、コモディティの上昇にも、豪州の利下げ観測にも大きく反応せず揉み合う値動きが継続しているが、多少の良い指標が出て利下げを織り込んでいる限りは、大きく上昇することは難しいものと考え。一方で、米国での利下げ観測も急速に高まっているため、豪ドルの行方は、豪州、米国、どちらに更なる利下げ観測が進むかに左右されよう。中期的には、米ドルの調整により、豪ドルの上昇を見込むが、今月については米中通商問題、英国のEU離脱の行方等の海外要因、国内指標を確認しながら、レンジ内での展開を予想する。

なお5月の連邦選挙の前哨戦とされた先月のニューサウスウェールズ州の選挙では保守連合が政権維持の結果となった。連邦選挙では依然として労働党の優勢が報じられており、労働党勝利の場合は若干の景気への影響が懸念されていることから、選挙に係る報道についても注意を払いたい。

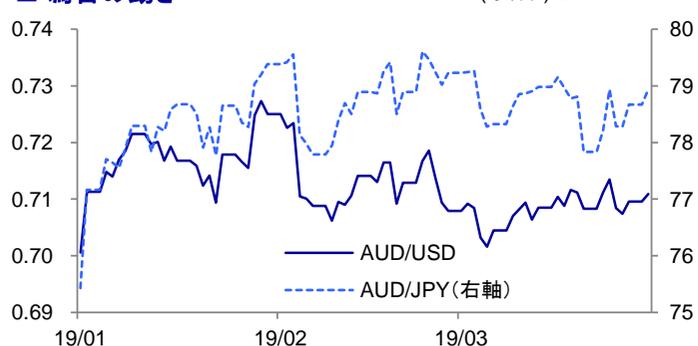
『当地に赴任する方へのお役立ち情報』

オーストラリアはことシドニーにおいては、アジア系の移民が多いためか、たいいていの日用品は揃います。通常のチェーン展開しているスーパーでも普通にマヨネーズ、ふりかけなどが手に入ります。しかし基本的に物価が日本に比べると全般的に高いため、懐にはやさしくありません。

日本から持ってきてよかったものとしては、加湿機能のある空気清浄機でしょうか。基本的に乾燥した気候であり、特に冬は湿度がかなり低いので、重宝しています。他にも、文房具、トイレトペーパーなどは日本のクオリティのものは中々手に入らないため、駐在員は帰国時に買いためする人も多いのではないのでしょうか。

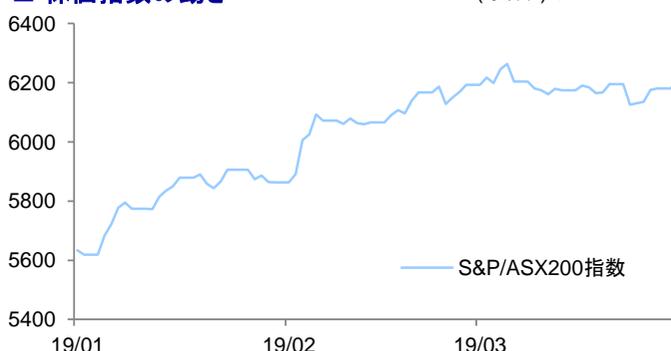
■ 為替の動き

(資料)ブルームバーグ



■ 株価指数の動き

(資料)ブルームバーグ



■ 先月の注目イベント

(資料)ブルームバーグ

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
3/4	住宅建築許可件数(前月比)	1月	1.0%	2.5%	-8.1%
3/5	豪州準備銀行理事会	3月	1.5%据置	1.5%据置	1.5%据置
3/6	GDP(季調済/前期比)	4Q	0.3%	0.2%	0.3%
3/6	GDP(前年比)	4Q	2.6%	2.3%	2.7%
3/7	小売売上高(前月比)	1月	0.3%	0.1%	-0.4%
3/21	失業率	2月	5.0%	4.9%	5.0%
3/21	労働参加率	1月	65.7%	65.6%	65.7%

カナダドル相場

予想レンジ: USD/CAD 1.3100 ~ 1.3600
CAD/JPY 80.00 ~ 86.00

グローバルマーケット業務部カナダ室 岩田 保子

■ 先月の為替相場

3月は、1日に発表された第4四半期GDPが予想を大きく下回ったことから、カナダ経済の先行きに対する不安が高まり、USD/CADはそれまでの1.31台半ばから1.33台までカナダドル売りが一挙に進んでオープン。

3月6日に開催されたカナダ中銀会合では、政策金利は予想通り1.75%で据え置き。ただし、今後の利上げについては、これまで声明文で維持してきた「(政策金利は)時間をかけて、中立のレンジまで引き上げる必要がある」との文言を削除、利上げのタイミングについては不透明感が増しているとし、ハト派姿勢を強めた内容となった。翌7日には、欧州中央銀行(ECB)が2019年の成長見通しを大きく引き下げ、政策金利の引き上げ時期を先延ばしするとともに、新たな市中銀行向け長期資金供給プログラムを打ち出し、金融緩和へとスタンスを転換。加えて、中国の2月貿易収支では米国との貿易摩擦の影響等から輸出入ともに予想よりも大幅減となり、市場では世界経済への先行きに対する懸念が高まり、USD/CADは1.3466までカナダドルが下落した。

中旬にかけては、カナダの2月雇用統計で予想以上の雇用者増となったこと、米中通商交渉への期待感、さらにはOPECによる6月までの減産延長等の報道を受けて原油価格(WTI)が上昇。約3週間ぶりに、USD/CADは1.3251までカナダドルが買い戻される場面もあった。しかし、2月中古住宅販売や1月新築住宅価格指数といった、これまでカナダ経済を支えてきた住宅指標が立て続けに軟調な結果となったことから、それ以上のカナダドル高に進むことはなかった。

月後半は、米中通商協議が継続、また英国のEU離脱問題が混迷化するなか、FRBはFOMCの結果を発表。政策金利は予想通り据え置きであったが、声明文では、米経済の成長が鈍化していると指摘。注目されていたドット・チャートでは、年内の想定利上げ回数はゼロ、2020年1回とそれぞれ12月時点から引き下げ、資産縮小も今年9月に終了とし、予想以上のハト派的なスタンスに転換。その後発表された米国と欧州の製造業景況感がともに予想を下回る結果であっただけに、市場では世界経済の減速が強く意識され、3月22日には米国をはじめカナダ、ドイツ等で3か月物と10年国債の利回りが逆転する逆イールドが発生。USD/CADは1.34台へとカナダドル売りが進んだ。

そのようななか、3月末に発表されたカナダの1月GDPは、予想を上回る堅調な結果となり、カナダドルが急伸。USD/CADは1.3350でクローズした。

■ 今月の見通し

FRBがハト派に転向、ECBも利上げの時期を今年夏から年末へと延期するなど、主要国の中央銀行が金融緩和策に軸足を移しているなか、カナダ中銀も4月24日の金融政策決定会合では政策金利は変更なし、今後の金融政策はデータ次第という姿勢を継続するものと予想される。

とりわけ、3月末に逆イールドが発生したことから、4月以降発表される重要経済指標がより一層注視され、グローバル経済が本当に減速しているのかどうか、その見極めが重要になるだろう。世界経済の減速が確認された場合には、現在60ドル近辺にある原油価格(WTI)が下落し、カナダ経済へのさらなる打撃になることが推測される。4月24日のカナダ中銀会合では、四半期に一度の金融政策レポートが発表されるが、そこでの同中銀による経済見通しは特に注目される。

その他のリスクとしては、引き続き、英国のEU離脱問題、さらには3月中に解決されなかった米中通商交渉の行方が挙げられる。

4月もメインシナリオは、米・カナダ両国の中央銀行のハト派スタンスを背景に、前月同様1.3台前半でのみ合いが続く展開。ただし、経済指標の悪化で景気減速との認識が市場に広がった場合には、3月につけた最高値(1.3468)を上抜けし、年初来高値の1.36台前半に達する可能性も予想される。

■ 今月のつづやき(現地からの声)

『当地へ赴任される方へのお役立ち情報』

この欄では、先月もカナダの「寒さ」が話題になりましたが、お役立ち情報も、やはり寒さ対策です。

もし春や夏に赴任された場合でも、まず冬用の防寒用コートとブーツをお買い求めください。カナダでは年中販売されています。

特に最近日本でも人気があるというCanada Gooseのコートは冬になってしまうと品薄状態になってしまいます。一着1000ドル(8万円以上)以上するものもありますが、見た目もそこそこよし、防寒効果は抜群、さらには終身の品質保証がついていて、いつでも修理してもらえます。

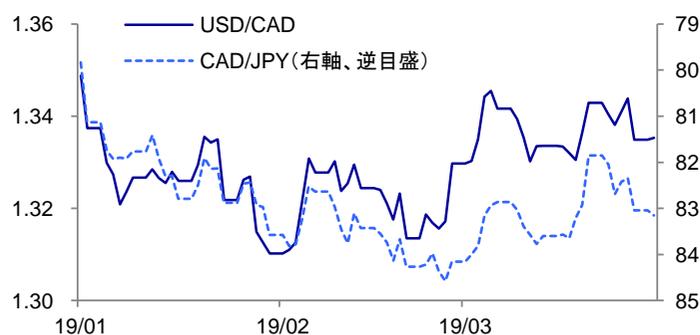
逆に言えば、冬用のコートはカナダで絶対買おうべきで、日本で着ているようなおしゃれなコートは残念ながら着る機会がありません。

靴もしかりで、日本で履いているようなデザイン性の高いブーツでは雪道、凍った道にまったく対応できません。靴底の分厚い、ギザギザとした滑り止めがしっかりついているスノーブーツをぜひ早めにご用意ください。

トロントに来て不思議なことのひとつに、とてもおしゃれなスーツ姿の男性でも、ズボンの丈が短いことがあります。これもスノーブーツを意識して、それにきっちり収まるように考えられた末の結果かもしれません。

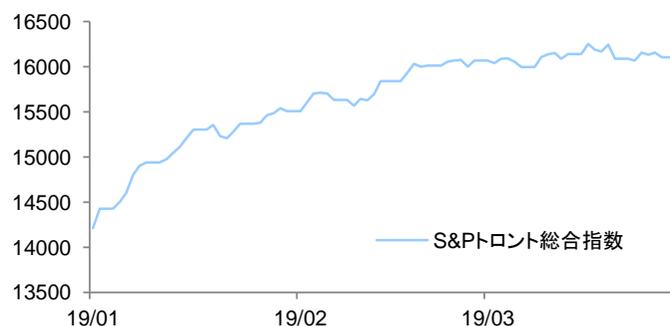
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
3/1	第4四半期GDP(前期比年率換算)	4Q	1.0%	0.4%	2.0%
3/1	GDP(前月比)	12月	0.0%	-0.1%	-0.1%
3/6	貿易収支	12月	-2.43b	-4.59b	-1.98b
3/6	カナダ中銀政策金利発表		1.75%	1.75%	1.75%
3/8	住宅着工件数	2月	205.0k	173.2k	206.8k
3/8	雇用者数変化	2月	1.2k	55.9k	66.8k
3/8	失業率	2月	1.7%	2.2%	1.8
3/22	小売売上高(前月比)	1月	0.4%	-0.3%	-0.3%
3/22	消費者物価指数コア(前年比年率)	2月	1.8%	1.8%	1.9%
3/29	GDP(前月比)	1月	0.1%	0.3%	-0.1%

韓国ウォン相場

予想レンジ:

USD/KRW	1110	1150
KRW/JPY	9.524	~ 10.000
JPY/KRW	10.000	~ 10.500

(注)100韓国ウォンあたりの対円レート

ソウル資金室 下山 泰典

■ 先月の為替相場

先月のドル/ウォン相場は、前月末比上昇した。月初は1126.00でオープンし、同日中に月安値となる1124.00をつける。7日海外時間のECB理事会でユーロ圏の成長率引き下げを含む弱気かつハト派的なトーンが示されリスクオフムードとなったことや、翌週は航空機墜落事故を受けた米大手航空機メーカーの株価急落を背景とするリスク回避的なムードに加え、15日には北朝鮮がミサイル打ち上げや核実験のモラトリアムを再考中との報道もあり、同日に1139台までドル高/ウォン安が進んだ。19-20日のFOMC前にはドルのポジション調整が入り、結果も明確にハト派的となると、21日のオンショア市場では月安値に迫る1124.40まで下落する。同水準では押し目買いも入り、22日海外時間にはドイツやユーロ圏のPMIが弱い結果となったことで世界的に景気減速懸念が高まり、リスクオフからウォン売りが加速、翌25日には1136台まで上昇した。その後はややもみ合ったが、27日の海外時間に、ドラギECB総裁のハト派的な発言等から世界的な景気減速懸念が改めて意識され、市場全体的にリスク回避的なムードとなる中で、ドル/ウォン相場もNDF市場でウォン安が進み、翌28日には月高値となる1139.50まで上昇した。月末は、1135.10でクローズした。

■ 今月の見通し

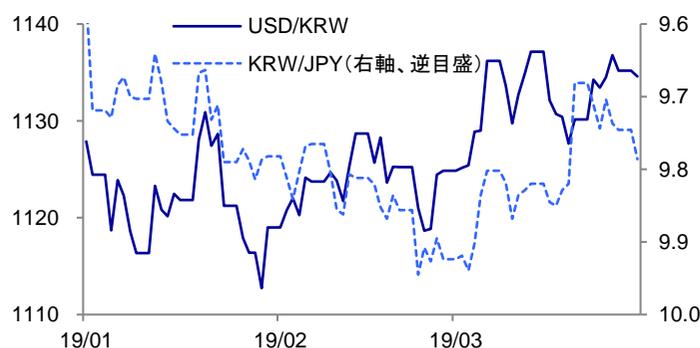
今月のドル/ウォン相場は引き続きレンジ相場を予想する。足元、世界の主要中央銀行がスタンスを軒並みハト派に傾斜させる中で、実際の経済指標も不芳なものが目立っており、リスク回避的なムードを醸成しやすくなっている。かかる中で先月のドル/ウォン相場はやや下値を切り上げた印象だ。今月は引き続き、世界経済の状況を見極める局面になりそうだ。現時点の不芳な経済指標の背景には、米中貿易摩擦やBrexitを巡る不確実性を受けて企業が活動を手控えた面も相応に影響していると思われる。本稿執筆時点でも、米中貿易協議や同首脳会談の行方、Brexitの決着の仕方は見通しがたいが、Brexitに関しては4月12日が英国にとっての期限であり、欧州側も同期を延長する意向はなからうから、少なくとも今月中に何らかの方向性は出ると思われる。仮に、合意なき離脱や国民投票の再実施といった結論になれば相場を一方に大きく動かす要因にならうが、メイ首相の離脱案が英議会で承認される展開となれば、一時的には振れても、不透明要因が1つなくなることで、相場は徐々に落ち着きを取り戻すと考えている。また、米中関係についても、4月中に首脳会談が開催される可能性は高いとは言えないだろう。好材料・悪材料が入り混じる形で、相場を上下させるものの、方向感を出すような材料が出てくることはなさそう。金融政策面を考えると、18日にBOK金融通貨委員会が開催されるが、FEDやECBが明確にはハト派的スタンスに舵を切る中、BOKは問題なく現状維持スタンスを取ることができるだろう。上記を勘案、今月のドル/ウォン相場の基本線は引き続きレンジ相場を予想しているが、不確定要素が多数存在していることは疑いようも無いため、突発的な変動等には常に注意を払いたい。

■ 今月のつぶやき(現地からの声)

『当地に赴任する方へのお役立ち情報』
4月は多くの会社で人事異動の時期でしょうか。韓国に赴任される方もひょっとしていらっしゃるかと思います。こちらに来て1年半になる私ですが、ソウルで知っておくとちょっと役立つ情報をお書きしたいと思います。ただ、あくまで個人的な経験に基づくものですので、悪しからず・・・。
①冬の寒さはとんでもない(表面気温マイナス20度、風を考慮した体感気温はマイナス30度近くになることも)
②一方で、最近夏も暑い、日本みたいに蒸し暑い・・・
③ソウル近郊の大型スーパーマーケットは第2・第4日曜日はCLOSE(日用品の買出し時等にはご注意ください)
④スーパーでのビニール袋は有料 & レジであらかじめ「ください」と言わないとくれなかったりする(ゴミ袋も有料なので、スーパーのレジでゴミ袋を買って、それに入れて帰ったりも)
⑤PM2.5対策は必須(赴任前に日本でマスクの箱買いをオススメします。)
⑥また、乾燥対策も必須(冬の「オンドル」がきいている部屋では、バスタオルが4~5時間で乾きます。ただの部屋干しです、タネも仕掛けもありません・・・)
⑦外食では野菜や魚が不足がちです、サブリーがあるといいかも
⑧辛いものを食べるとお腹いたくなったりしますので、整腸剤や胃薬も大事
・・・という記載しましたが、辛いものが全くダメな私でも少なくとも今まで1年半やつれることなく(いや、むしろ太ったぐらい・・・)元気に過ごしております。お肉にサムゲタンにタッカンマリにと美味しいものをたくさん召し上がっていただけたと思いますので、太れるだけのパワーを持っていらしてください。(下山)

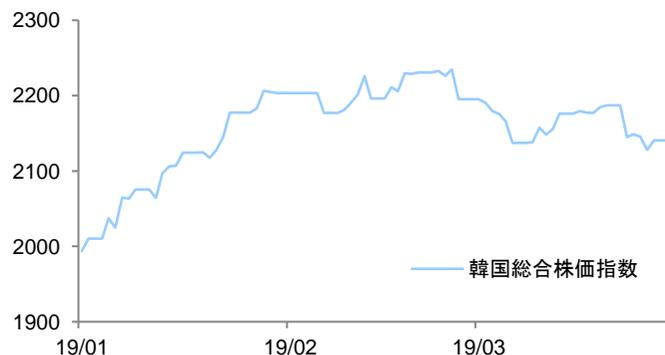
■ 為替の動き

(資料)ブルームバーグ



■ 株価指数の動き

(資料)ブルームバーグ



■ 先月の注目イベント

(資料)ブルームバーグ

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
3/1	輸出(前年比)	2月	-9.5%	-11.1%	-5.9%
3/1	輸入(前年比)	2月	-11.6%	-12.6%	-1.7%
3/5	GDP(前年比、確報値)	4Q	3.1%	3.1%	3.1%
3/5	CPI(前年比)	2月	0.7%	0.5%	0.8%
3/8	経常収支(国際収支ベース)	1月	-	\$2772.3M	\$4819.3M
3/8	貿易収支(国際収支ベース)	1月	-	\$5609.5M	\$6529.4M
3/13	失業率	2月	4.2%	3.7%	4.4%
3/27	消費者信頼感	3月	-	99.8	99.5
3/29	鉱工業生産(前年比)	2月	-0.5%	-2.7%	-0.2%

台湾ドル相場

予想レンジ: USD/TWD 30.70 ~ 30.95
TWD/JPY 3.50 ~ 3.70

台北資金室 三浦 勇二

■ 先月の為替相場

3月のドル/台湾ドル相場は、30台後半での狭いレンジ内で推移。

月初3/4のドル/台湾ドルは30.800でオープン。台湾の連休中にドルが上昇したことを受け、ドル買い台湾ドル売りが先行し、30.835まで上昇。その後、輸出企業のドル売りに上値を押さえられる場面もみられたが、株安の流れからドル買い地合いが続く中、30.8台半ばで底堅く推移。3/7に開催されたECB政策理事会は、GDPのスタフ見通しが大幅に引き下げられるなど、ハト派的な結果となったことから、対ユーロでドルが上昇すると、翌3/8の台湾市場でもドル買いの流れが強まり、ドル/台湾ドルは30.897まで上昇した。

その後、3/11には株価が上値重く推移し、台湾株からの海外資金の流出が膨らんだことも相俟って、ドル/台湾ドルは3月の高値となる30.920をつけるが、3/12以降は株価が持ち直し始めたことや、輸出企業のドル売り台湾ドル買い取引に上値を押さえられる展開が続く、30.8台を中心に小幅なレンジで推移した。

月後半に入ると、株価の堅調な推移や、輸出企業のドル売りフローから台湾ドル買いの流れとなり、3/19にかけて30.773まで下落。注目されたFOMCでは、FOMCメンバーの2019年の利上げ見通しが12月時点の2回から0回へと下方修正されたことに加え、バランスシートの縮小を5月からペースを鈍化させて9月にも停止することが発表された。会合後のパウエルFRB議長の記者会見も全体的にハト派的であったことから、会合後はドル安の流れとなると、翌3/21の台湾市場では、30.750の安値をつける展開となった。

3/25には海外市場で欧州の経済指標の悪化をきっかけにリスクオフムードが強まり、株が大幅安となったことから、台湾株も軟化し、ドル/台湾ドルは一時30.865まで反発する場面もみられたが、月末にかけては輸出企業のドル売り取引が増加する中、上値は押さえられ、30.8台での推移が続いた。

■ 今月の見通し

4月のドル/台湾ドル相場は、上値の重い推移を見込む。

3月に発表された経済指標をみると、2月の輸出額が前年比-8.8%の減少。米中通商協議の先行き不透明感などから伸び悩み、4か月連続でのマイナス成長となった。指標の内訳をみると、2月は製品別では主力の電子部品が同-8.3%、地域別では全体の4割超を占める中国・香港向けが同-10.4%とともに落ち込み、全体の輸出額の伸びを鈍化させる要因となった。台湾統計局は1-3月期の輸出額が当初の見込みの同-2.8%を下回り、3%超のマイナスとなる可能性を示唆するなど弱気な見方を示している。そのほか、3/21には四半期に一度の台湾中央銀行金融政策決定会合が開催された。GDP、CPIの見通しが2.13%、0.91%にそれぞれ下方修正されたほか、輸出の低迷が続く中、緩和的な金融政策を続けていく姿勢が示され、政策金利である公定歩合は11会合連続で1.375%での据え置きとなった。

4月は米中通商協議に進展がみられるかが注目される。4/3からはワシントンで閣僚級協議が行われ、4月下旬にもトランプ米大統領と習近平中国国家主席の首脳会談が行われる見通しとなっており、貿易戦争が終結に向かうのかが注目される。

また、台湾では年初からの株高が続くかが注目される。3月FOMCではFOMCメンバーの利上げ見通しが引き下げられ、さらに、バランスシートの縮小停止も発表され、Fedの金融政策正常化プロセスが終了との見方が広がっている。こうしたFedのハト派化が株式市場で好感される状況が続く、株高が続く展開となれば、海外からの資金流入も増加しやすく、為替市場では、ドル/台湾ドルは台湾ドル高圧力が強まりやすいか。

■ 今月のつづやき(現地からの声)

『当地に赴任する方へのお役立ち情報』

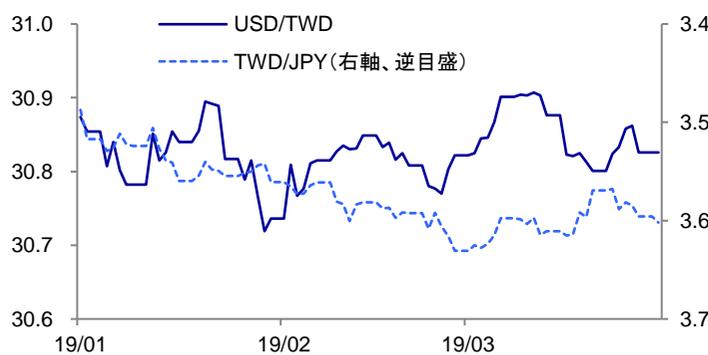
まず、日本と比べ暖かい台湾。北部に位置する台北市でも、10度を下回ることほとんどありません。そのため、ダウンなど、冬物コートの出番はほとんどありませんので、持って来る必要はないと思われます。逆に持って来ると、湿度が高いので、カビが生えないように保管するのに気を使わなくてはなりません。

食事については、台湾には日本食のお店が非常に多く進出してきております。寿司、焼き肉、ラーメン、牛丼などなど、ジャンルは様々です。したがって、単身で赴任しても、家族帯同で赴任しても、まず食事に困ることはないと思われまます。自炊するにしても、日本の調味料や食材がやや値段は高いですが、多く売られておりますので、日本でたくさん調達する必要はないです。

そのほか、週末は仕事の関係や、大学のOB会などでゴルフをする機会が増えるケースが多いように思います。ただ、台湾ではクラブ等のゴルフ用品が高いので、買い替えを検討する場合、日本で事前に揃えたほうが割安に済ませられると思われまます。

■ 為替の動き

(資料)ブルームバーグ



■ 株価指数の動き

(資料)ブルームバーグ



■ 先月の注目イベント

(資料)ブルームバーグ

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
3/6	外貨準備高	2月	-	463.94B	463.04B
3/8	CPI(前年比)	2月	0.30%	0.23%	0.18%
3/8	輸出(前年比)	2月	-0.70%	-8.80%	-0.30%
3/8	輸入(前年比)	2月	4.80%	-19.70%	6.80%
3/8	貿易収支	2月	2.10B	4.93B	0.91B
3/8	貿易収支	2月	2.10B	4.93B	0.91B
3/20	輸出受注(前年比)	2月	-5.60%	-10.90%	-6.00%
3/21	政策金利	-	1.375%	1.375%	1.375%
3/22	失業率	2月	3.72%	3.71%	3.72%
3/25	鉱工業生産(前年比)	2月	-1.70%	-1.80%	-1.86%

香港ドル相場

予想レンジ: USD/HKD 7.8300 ~ 7.8500
HKD/JPY 13.75 ~ 14.30

香港資金部 Ken Cheung

■ 先月の為替相場

【3月の香港ドル直物相場】

3月の香港ドルは、大幅拡大している米ドルと香港ドルの金利差を背景に、昨年9月以来で初めて取引バンドの下限である7.85まで下落した。香港金融管理局(HKMA)は通貨防衛の為に120億香港ドルの香港ドル買いの為替介入を実施した。ただし、FRBがバランスシート縮小計画を終了し、今年後半の利上げを諦めたことにより、香港市場からの資本流出圧力は抑制された。また、米中通商協議への継続的な楽観的見方は、香港市場を含むアジアエマージング市場の資本維持に役立っている。人民元/香港ドルは、ストックコネクトを介した中国A株購入のための人民元買い/香港ドル売りフローが見られ上昇した。ハト派なFRBが、香港市場の利上げ観測を後退させたことで、1年物の香港ドルフォワードは▲520ポイントを付けた後、▲660ポイント近くまで下落した。

【3月の香港ドル金利市場】

短期の香港ドルHIBORは上昇した。1か月物の香港ドルHIBORは、HKMAは香港ドル安を受けたHKMAによる流動性の吸収と四半期末の季節的要因で、3月上旬の1.0%から1.8%近くまで上昇した。同様に、3か月物HIBORは3月上旬の1.6%から1.9%近くまで上昇した。また、流動性の指標であるHKMAの決済性預金残高は前月の763億香港ドルから678億香港ドルに減少した。一方、1か月物と3か月の香港ドルHIBOR-ドルLIBORスプレッドは、それぞれ▲150bpsと▲100bpsから▲70bps前後まで縮小した。長期金利については、3年物および5年物の香港ドルIRS金利は2%以下に低下し、ハト派だったFOMC後の米ドルIRS金利の低下を追随した。

【3月の香港株式市場】

ハンセン株価指数(HSI)は、9か月ぶりの最高値29,486を付けた後、28,500まで後退。米中通商協議への楽観的な見方や、中国が景気刺激策を打ち出したことは既に市場価格に織り込み済みとなっている為、香港株式は勢いを失いつつある。また一方で、世界的な景気後退に対する懸念の高まりは香港株式の下振れリスクをもたらした。

■ 今月の見通し

【4月の香港ドル直物相場】

4月の香港ドルの取引レンジは7.83-7.85と予想する。米国と香港の金利差は大幅拡大したままであり、FRBがさらにハト派にシフトしたが、香港ドルは取引バンドの下限である7.85近辺で弱含みに推移するだろう。FRBが利上げサイクルを一時停止した場合に香港の市中銀行が利上げをしないという市場予想を覆す為には、HKMAによる香港ドルの積極的な流動性の吸収という「独立した香港ドル金利の利上げ」の行動が、必要であると思われる。さらに、主要中央銀行が金融引き締めや正常化を諦めた為、資本流出リスクは抑制されたままになるだろう。また市場参加者は、米中通商協議の進展を見込んでおり、香港市場に資本を維持することは望ましいと感じているだろう。

【4月の香港ドル金利市場】

HKMAが流動性の吸収を実施したにもかかわらず、香港ドルの流動性状況は依然として十分潤沢である。確かに、香港ドルの流動性バッファーは昨年4月に初めて行われた香港ドルの流動性吸収したときと比較すると徐々に減少している。そして我々はHKMAの決済性預金残高が約100億香港ドルに低下したとき香港市中銀行は資金調達圧力の上昇に直面すると考える。その他の観点では、香港ドル金利は、四半期末の季節的要因の剥落と香港株式市場でのIPOが静かであることから、4月に低下すると予想する。結局、FRBが利上げサイクルを一時停止したとしても、香港の市中銀行は金利水準を現状維持すると予想される。こうした背景から、今年の香港ドル金利の上昇圧力についてもやや緩やかなものとなるだろう。

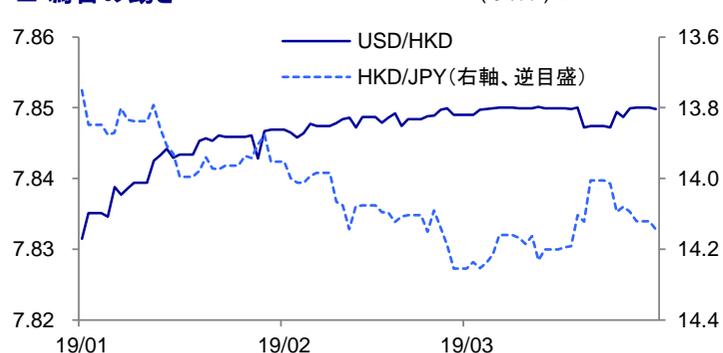
■ 今月のつづやき(現地からの声)

『当地に赴任する方へのお役立ち情報』

香港は国際都市であり、世界中の赴任者に支持されている。香港には香港島の太古城(タイクーシン)や九龍半島の紅磡(ホンナム)等の、いくつかの小さな日本人街があります。尖沙咀(チムサアチョイ:私達のオフィスがある場所)と中環(セントラル)の蘭桂坊(ランカイフォン)は、飲み屋が多く、お酒を飲みに行くのにはとても良い場所です。また、香港では交通機関が割安で便利です。オクトパスカードを購入すると、鉄道やバス(タクシーを除く)等のほとんどの輸送手段に乗ることができます。住宅価格は高騰しており、賃貸料は驚くほど高くなっております。

■ 為替の動き

(資料)ブルームバーグ



■ 株価指数の動き

(資料)ブルームバーグ



■ 先月の注目イベント

(資料)ブルームバーグ

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
3/5	日経香港PMI	2月	-	48.4	48.2
3/5	小売売上高(価額/前年比)	2月	1.10%	7.10%	0.10%
3/7	外貨準備高	2月	-	\$434.5b	\$432.1b
3/19	総合利率	2月	-	0.80%	0.83%
3/19	失業率(季調済)	2月	2.80%	2.80%	2.80%
3/21	CPIコンボジット(前年比)	2月	2.10%	2.10%	2.40%
3/22	輸出(前年比)	2月	-2.40%	-6.90%	-0.40%
3/26	輸入(前年比)	2月	-4.40%	-3.80%	-6.00%
3/26	貿易収支(HKD)	2月	-40.5b	-48.8b	-10.3b

中国人民元相場

予想レンジ:	USD/CNY	6.5000	~	6.9000
	CNY/JPY	15.36	~	17.08
	100JPY/CNY	5.8600	~	6.5100

みずほ銀行(中国)有限公司 中国為替資金部 馬場 一樹

■ 先月の為替相場

【為替相場】

3月のドル人民元相場は米中通商協議の関連報道や、米欧中央銀行の決定会合の結果を受けた海外市場動向に振られ、6.70を挟んで上下する展開となった。

月初は「米中通商協議合意に近い」との報道でドル/元は一時6.68台まで元高が進行したものの、その後ECB理事会や米雇用統計を控える中で6.71台まで買い戻しが入った。5日には全人代が開幕、政府活動報告では2019年の各種政府目標や景気対策等が盛り込まれたが、想定内の内容だったこともあり相場への影響は限定的だった。7日に開催されたECB理事会ではユーロ圏経済見通しが下方修正され、新たな長期資金供給オペが決定されたこと等を背景にユーロ安ドル高が進行、ドル/元も6.72近辺までドル高元安が進行した。

その後はまちな中国経済指標や「米中首脳会談を4月まで延期する」との報道等を背景に6.72近辺で推移していたものの、20日のFOMCでは市場予想以上にハト派な内容となったことを受けてドル売りが進み、ドル元も一時6.67近辺まで水準を切り下げた。しかし、すぐにドル巻き戻しの動きがみられると、ドル元も6.70台まで水準を戻す展開となった。

月末にかけては、米中通商協議の行方を控える中、ドル元は6.71前後での推移となった。

【金利相場】

月前半は公開市場操作の見送りが続き、需給が均衡する中で市場金利は概ね安定的に推移。月後半にかけては、16日に中期貸出制度(MLF)3,270億元の期日が到来し資金需給がタイト化したことや、月末越え資金調達ニーズの高まり等を背景に短期ゾーン中心に金利上昇。3M SHIBORは2.83近辺まで上昇となった。

■ 今月の見通し

【為替相場】

米中通商問題については現在合意に向けて協議が継続しており、4月とみられる米中首脳会談までは方向感の出にくい展開か。但し、米国の利上げが既に年内0回となり、米金利低下及びドル安の動きが次第に強まってくると、ドル/元もドル安の動きで元高圧力が強まる場面が出てくる可能性も。

但し、欧州では引き続きBrexit問題が煽っている中、主要経済指標も軟調な結果となっており、景気浮上のきっかけを掴めない状況。引き続き欧州景気不透明感が強まるようであればユーロ安ドル高の動きが強まり、ドル/元も元高の動きが抑制されるため注意が必要。

【金利市場】

先月後半は短期ゾーンの金利を中心に上昇圧力の高まりが見られたが、全人代でも示されたように、中国当局は引き続き潤沢な流動性供給を実施する見込み。ターム物金利は低位推移している中、金利は全般的に安定した推移を予想。

■ 今月のつづやき(現地からの声)

『当地に赴任する方へのお役立ち情報』

そろそろ上海赴任2年目が終わろうとしていますが、目まぐるしく生活環境が変わっていく中国における、これから赴任する方向けのお役立ち情報をお伝えします。

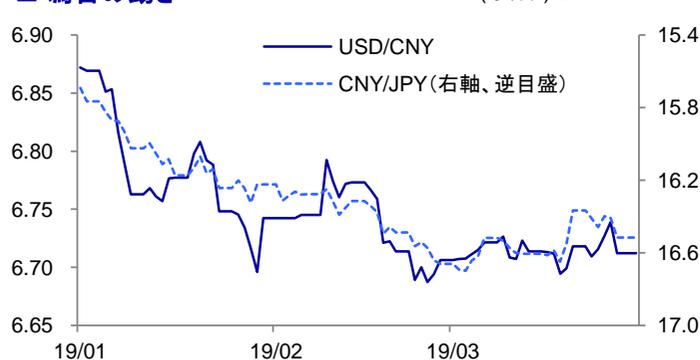
まずは語学。生活において英語はほぼ通用しないと行ってよく、上海でも最低限の中国語は必須、国内旅行の場合はさらにハードルが上がります。但し、中国語が少しでも出来ると一気に暮らしが便利になり、そして何より世界が広がりますので、勉強しておくことをお勧めします。更に、「せっかくなら中国国内旅行をしたい」と思われる方は是非、中国の歴史小説(三国志、春秋戦国時代、清の時代や近代史等)を読むことをお勧めします。中国は他の国にはない深い歴史があり、中国全土にドラマがあります。事前の知識があるかないかで旅行した時の感動が全然違いますので、Kindleに沢山関連書籍を入れて来てください。

また、赴任前に新しい財布を買うのは控えた方が良いでしょう。中国は完全にアプリ決済が浸透。アリペイとWechatで生活にかかわるほぼ全ての決済、スマホアプリで行うサービス(中国版uberの滴滴やシェア自転車、航空・鉄道チケット購入、地下鉄等)の決済、更に友人との資金のやり取り等が行われます。お店によっては現金を嫌がる所もありますので、来た直ぐにアプリを設定してください。ちなみに私は財布を持ち歩きません。財布買うくらいなら新しい携帯を購入した方がいいかと思います。また、基本的にGoogleやLINE、Facebook等SNSは使用できませんので、ご家族、親族にはWechatをダウンロードしてもらい、また現地のスタッフにも自分のIDを事前に教えておくと、中国に降り立った瞬間に連絡が取れなくなるということが無くなるので安心です。

VPNは最近急にいくつか使えなくなったところが出てきましたので、どこが繋がるVPNなのかは現地に来てから確認して頂ければと思います。

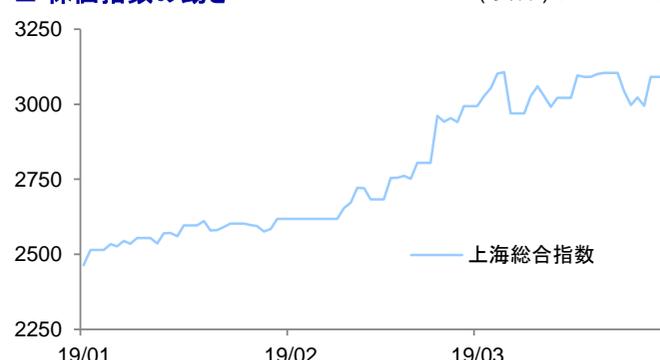
■ 為替の動き

(資料)ブルームバーグ



■ 株価指数の動き

(資料)ブルームバーグ



■ 先月の注目イベント

(資料)ブルームバーグ

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
3/9	PPI(前年比)	2月	0.2%	0.1%	0.1%
3/9	CPI(前年比)	2月	1.5%	1.5%	1.7%
3/8	貿易収支(RMB建)	2月	250Bio	34.46Bio	271.16Bio
3/8	輸出(RMB建)前年比	2月	6.6%	-16.6%	13.9%
3/8	輸入(RMB建)前年比	2月	6.2%	-0.3%	2.9%

シンガポールドル相場

予想レンジ: USD/SGD 1.3400 ~ 1.3600
SGD/JPY 80.00 ~ 83.00

アジア・オセアニア資金部 前川 真也

■ 先月の為替相場

3月のシンガポールドル(SGD)相場は、月初1.35台前半でオープン後、第2週目にかけてドル買戻しが強まる中、一時1.36台前半まで売られた。中旬から下旬にかけては、米中通商協議への期待が高まりや米FOMCのハト派化により、新興国通貨が強含み、SGDは一時1.34台半ば付近まで買われた。月末にかけては、ドル買戻しが入り、1.35付近まで戻す展開となった。

第1、2週、米4Q GDPが予想を上回ったことを受けて、米金利が上昇し、ドルが堅調に推移したことから、SGDは1.35台前半から1.35台半ばまでジリジリ値を下げる展開となった。7日ECB政策理事会では利上げ時期が来年に先延ばしされたことからEURの急落に連れられ、ドル買いが一層強まり、SGDは1.36台前半まで売られた。

第3週、11日米2月雇用統計の結果を受けた米金利低下を背景としたドル安やSGD買いが強まる展開となった。12日米中通商協議を巡る楽観的な見方や、中国当局の経済支援に向けた刺激策への期待からSGD買いが継続した。13日欧州時間には英国議会でEU離脱修正案への期待高まりを背景にポンドが上昇、ドルが弱含む中、SGDは一時1.35台前半まで買われた。14日英国議会で修正案が大差で否決されるとドル買戻しが入り、SGDは1.35台半ばまで売られる展開となった。

第4週、18日シンガポール2月非石油地場輸出が市場予想マイナスに対して幅が拡大したことを受けて、SGDは1.35台後半まで売られた。19日、20日米FOMCを控え様子見ムードが広がり小動きとなった。21日市場予想よりもハト派な内容となった米FOMCを受けて、ドル売りが強まる中、SGDは一時1.34台半ばまで買われた。21日、22日徐々にドル買戻し入り、1.35付近まで売られた。

第5週、25日シンガポール2月CPIが発表され、市場予想を下回る内容となった。また、世界経済の減速懸念を背景に下落していた各国の株式相場が持ち直すに連れて、リスクセンチメントが改善、SGDは1.35台前半で底堅く推移した。

■ 今月の見通し

4月のシンガポールドル(SGD)相場は、1.35台を中心としたレンジ内での揉み合いを予想。シンガポール国内のトピックでは、今月開催が予定されているMASの通貨政策に注目が集まる。他方、外部要因では、英国のEU離脱協議の不透明感及び欧州域内の経済減速懸念が強まっている。米国では、先月のFOMC金利見通しにおいて2019年の利上げ予想が2回から0回に引き下げられた他、バランスシートの縮小ペースが5月から減速し9月には停止する等、予想以上のハト派な結果となり、米金利は大きく低下している。FRBのハト派姿勢が継続する中、ドル買い圧力が弱まる局面もあろう。また、先月28日より再開された米中通商の閣僚級協議の進展も注目される。上記様々な要因が絡み合う中、SGDはやや方向感の出づらいつ展開となろう。

今月は、MASによる半期に一度の通貨政策見直しが最大の焦点となろう。昨年4月に2年ぶりに中立スタンスから金融引き締めスタンスに舵を切り、名目実効レートベースのSGD高誘導を再開した。続く10月にも更なる引き締めを実施し、SGD名目実効為替レート(NEER)をSGD高方向へ誘導するペースを加速させている。今月のMASで更なるSGD高誘導ペースを加速させるかどうかについては、市場の見方が大きく分かれる。先月25日発表されたシンガポール2月CPIは、市場予想を下回る内容となり、物価上昇が安定的な推移である点を踏まえると今回は追加引き締めを見送る可能性が高いととれる。また、世界経済の減速懸念が強まっている中、各主要中銀は緩和スタンスへの方向転換を進めるとも考えづらい。いずれにせよ、MASが現状と今後の成長見通しをどの様に示すのか注目したい。

■ 今月のつづやき(現地からの声)

『当地に赴任する方へのお役立ち情報』
当地に赴任して10か月近くになる筆者には、本テーマには持って来いです。より多くの有益な情報を詰め込む為、箇条書きでシンガポールについてご紹介致します。物価が高いです。特にアルコール。お好きな方は免税の範囲で出来るだけ多くお酒を持ち込むと良いかと思えます。

お金を出せば欲しいものは大体手に入ります。なのに、交通費は激安。特にタクシー。空港から中心地まで20-30分高速を飛ばしても2,000円程度です。道路の造りが歩行者では無く、車優先。その為、交通渋滞は殆どありません。

室内はどこも20度近くまで冷房で冷やされており、半袖だとすぐに風邪をひきます。上着は必須です。英語が苦手な人にも優しいです。一生懸命みんな聞いてくれます。「Can」が言えれば何でも「Can」です。

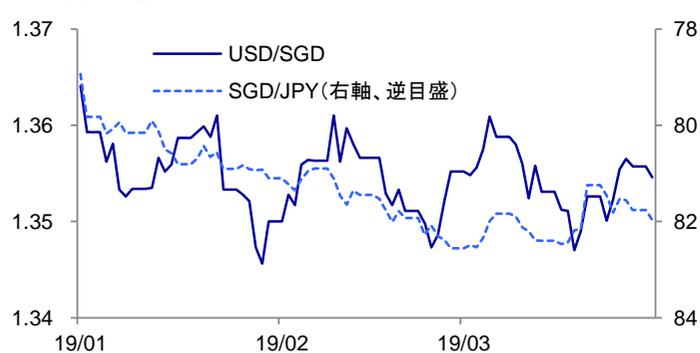
料理がとにかく脂っこいです。スパイシーとメニューに書かれていると非常識な程辛いパターンが多いです。名物はチキンライスやチリクラブではありません。バクテー、フィッシュヘッドカレー、ラクサやカヤトースト等、盛り沢山です。

水道水が飲めます。あまり美味しくないです。スポーツ環境がとても良いです。水泳、テニス、ゴルフは勿論、やろうと思えばアイスホッケーも出来ます。治安の良さは日本並みかそれ以上です。但し、泥酔して道で寝たりするとタイホです。

電車で水を飲んだりすると罰金です。なんでもかんでも罰金です。書ききれないので、纏めますと、日本に住むのと殆ど変わらない生活出来る常夏の国ですので、赴任に際してご心配は不要です。
(田才 雄)

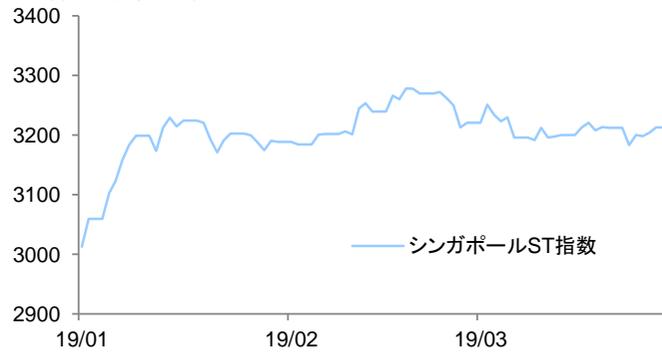
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
3/4	購買部景気指数	2月	50.4%	50.4	50.7
3/12	小売売上高(前年比)	1月	2.6%	7.6%	-5.8%
3/18	非石油地場輸出(前年比)	2月	-1.6%	4.9%	-10.1%
3/25	CPI(前年比)	2月	0.6%	0.5%	0.4%
3/26	鉱工業生産(前年比)	2月	-0.4%	0.7%	-0.4%

タイバーツ相場

予想レンジ: USD/THB 30.50 ~ 32.00
THB/JPY 3.45 ~ 3.55

バンコック資金室 橋 雄史

■ 先月の為替相場

3月のドルバーツは方向感に乏しい展開
月初1日のドルバーツは31.50台後半でスタート。前日からのドル買いの流れが継続し、人民元安の流れが強まると31.80付近まで上昇。またこの日はタイ2月消費者物価指数が発表され、前年比+0.73%(予想+0.59%)となったものの、相場への影響は限定的となった。4日は前週からのバーツ安基調が継続する中で一時31.90近辺まで上昇。5日のドルバーツは32.00を前に上昇が一服し、海外投資家の債券購入額が2月20日以来ぶりの大幅増となったこともあり、31.75近辺まで下落。6日は人民元の急落をきっかけにタイバーツもバーツ安が進行し、再び31.90近辺まで上昇。7日は憲法裁判所が国家維持党に解党を命じたことを受け、月間高値となる31.95近辺まで上昇するも、その後は利益確定の動きからか31.80近辺まで急落。8日はMPCメンバーであるカニット氏から、3月に利上げが実施される可能性は低いとの発言があったもののバーツ相場の反応は限定的。12日は公表された2月消費者信頼感指数が2ヶ月連続で前月を上回り、ドルバーツは13日にかけて31.60台前半まで下落。14日は31.80に迫る勢いで上昇を見せるも、その後は動意を失い、ドルの弱さとMPC及び総選挙を控える中、31.70近辺でレンジ推移。20日はMPC結果がアナウンスされると、ハト派な内容を受けて31.80近辺まで急騰した。22日、ドルバーツは31.70近辺でオープン。週末にタイ総選挙を控える中で小幅にバーツ安が進み、ドルバーツは31.75近辺でクローズ。週が変わって、25日はスタートからバーツ高が進行。週末に実施されたタイ総選挙では、新軍政政である「国民国家の力党」が事前予想を大きく上回る票を獲得したとの報道がなされ、タクシン派の「タイ貢献党」は獲得議席を伸ばせず、プラユット首相の続投が予想される中、ドルバーツは月間安値となる31.50近辺まで下落。翌26日は前日の流れを受けて下押し圧力が強まり、31.50台半ばで底堅く推移したが、タイ時間オープン直後に反転し、31.65近辺まで値を戻した。27日はタイ貢献党や新未来党が軍事政権に反対し反軍政連合を結成し過半数確保を目指すとの報道を受け、政治リスクの高まりからバーツ安が進行。人民元安も相まって、ドルバーツは31.90近辺まで上昇した。28日は政治リスクが意識される中で月間高値近辺まで上昇するが、その後は上昇も一服し、31.80近辺まで値を戻した。29日は2月の貿易統計で輸入が大きく予想を下回る結果となり、米中貿易協議についての進展期待の高まりから人民元買いが強まると、ドルバーツは31.70近辺まで下落し、越月となった。

■ 今月の見通し

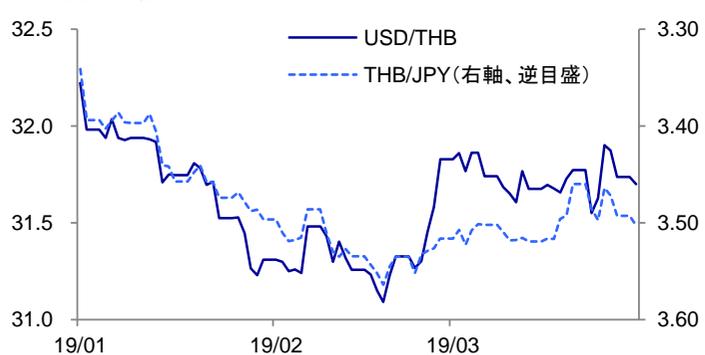
4月のドルバーツは、方向感に乏しい展開を予想する。
3月24日に実施されたタイの総選挙では、市場予想と異なり、親軍政権の国民国家の力党が獲得数を大きく伸ばす結果となり、プラユット氏の続投が見込まれる結果となった。今回の総選挙は空港閉鎖等の大きな暴動が起きなかったこともあり、選挙明けの25日はバーツ高が進行。ただし翌日には、反軍政を唱える各党が連立して過半数獲得を目指すとの報道が成され、タイの政治リスクが嫌忌されると、ドルバーツは反発を見せ、32.00手前まで上昇した。為替相場の変動がタイの選挙動向のみで決まるわけではないものの、総選挙を終え、一筋縄ではいかないタイの政治リスクに対しては、海外投資家を中心に不透明感が払拭できないところも多く、先行きが見通しにくい状況となっている。チャートの的にも、ドルバーツは日足の一目均衡表の雲の中に入り、厚めの雲を上下に抜け切れない状態となっている。こうした状況を打破するためには、タイ国内の経済指標に大きな変動が見られることが一つのきっかけとなろうが、足元発表された経済指標では軟調な結果を示しており、次回データでの見極めが必要な状況。また4月のタイはソンクラン休暇に入るため、タイ全体を通して年末年始ムードが高まっていくこともあり、経済活動についても、ややスピード感に欠ける展開が予想される。そうした中、ドルバーツの方向感を決める材料といえば国外材料となりそうで、何と言っても米国とドルの動向が注目される。先月19-20日に開催されたFOMCでは、2019年度の利上げ見通しが2回から0回に引下げられたこともあり、FOMC後はドル売りが強まる展開。米金利低下のみならず、各国中銀のハト派傾斜観測が強まったことで欧州債等の金利も大きく低下し、グローバルに金利低下が進行。米金利が逆イールド構造を示していることもあり、リセッション懸念の高まりから株式市場も軟調な推移を示しており、リスクセンチメントの低下が心配される状況。米中貿易協議についても一旦は様子見ムードとなっておりますが、3月末は再び人民元安が加速するなど、こちらも再び注意を集めそうな状況であり、プレクジット動向も一進一退の展開を続ける等、各種材料が絡まりあう中で、複雑な相場環境を呈している。上記材料を勘案するに、タイの国内材料は選挙を終えてトピックにかける状況が続く中、今月のバーツ相場はドルを中心とした外部材料に振られる展開が予想され、ドルバーツは方向感に乏しい展開を予想する。

■ 今月のつぶやき(現地からの声)

『当地に赴任する方へのお役立ち情報』
・バンコクに勤務する上で、非常に役立つ情報といえば、駐在員妻のインスタグラムに勝るものはありません。私の妻も赴任前からインスタで情報収集に励み、生活面で色々有益な情報を得ておりましたが、赴任してからもインスタで得られる情報の多さには非常に関心させられます。人気のランチ店に始まり、帰国時のお土産情報、お勧めの歯医者から、シーローの乗り方と価格情報。それ以外でも、本人確認資料として便利なパスポートのラミネート加工の方法等、日頃の生活では手に入れることが出来ない情報を手に入れることができます。また、バンコクに赴任される方の多くはゴルフ好きな方が多いと思いますが、ゴルフ場で大きな割引が利く「クラブタイランドカード」の発行はマスト。バンコクでは電子マネーの流通は進んでいない印象がある一方、PromptPayという銀行口座番号に紐付けられた携帯電話番号を使い、モバイルバンキングで送金できる国内送金システムが流通しており、こちらの機能はとて便利です。ランチの精算やちょっとした金額の一時立替えなど、携帯一つで手軽に資金移動が出来るため、一度使ってしまうと手放すことは出来ません。その他、日常の移動で役立つ情報としては、BTS(スカイトレイン)を使用する際に使用するrabbit cardは欠かせません。日本では電子マネーの代わりがありますが、バンコクではBTSを乗る時間によっては、切符の購入の列が長く伸びてしまうこともあり、BTS移動を快適にするためには必要不可欠です。車移動における注意点としては、バンコクは渋滞がひどいためGoogleMapを活用することも多いのですが、ひとたび渋滞にはまってしまうと、わずかに数百メートル移動するだけでも30分以上かかってしまうことも度々。夕方の時間にどうしても車移動が必要な場合は、混んでいてもBTS近辺の道を使用し、いつでも電車に乗り換えられるルートを取られることをお勧めします。

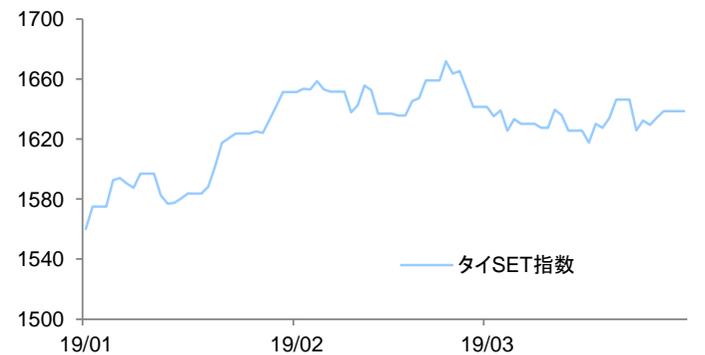
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
3/1	消費者物価指数(前年比)	2月	0.59%	0.73%	0.27%
3/1	CPIコア(前年比)	2月	0.70%	0.60%	0.69%
3/12	消費者景気信頼感指数	2月	-	69.0	67.7
3/20	タイ中銀政策決定会合	3月	1.75%	1.75%	1.75%
3/29	貿易収支	2月	-	\$3,455M	\$63M
3/29	輸出(前年比)	2月	-	-1.70%	-4.70%
3/29	輸出(前年比)	2月	-	-7.30%	4.20%
3/29	経常収支	2月	-	\$3,344M	\$2,260M

マレーシアリング相場

予想レンジ:	USD/MYR	4.0100	~	4.0800
	MYR/JPY	26.90	~	27.50
	JPY/MYR	3.6350	~	3.7200

マレーシアみずほ銀行 関上 伸一

■ 先月の為替相場

3月のMYR相場は、米中通商摩擦やブレクジットを巡る霧が晴れきれなかったものの、海外からの資本流入が確認される中、4.05—4.10レンジで安定推移した。

2月に幾たびか4.06割れを試しては失敗した後、月初MYRは世界経済の成長減速に関するリスクファクターを受けて反落する展開。3月5日中国全人代にて、2019年度GDP成長率目標が2009年来最低の6.0%—6.5%に設定。同日マレーシア中銀も政策金利(OPR)を3.25%で据置き、声明で貿易摩擦や軟調な商品価格への懸念を表明。翌6日に米2018年貿易赤字が10年ぶりの高水準と発表。更にECBも2019年ユーロ圏成長率見通しの引下げを受け、利上げ開始の2020年への先送り方針を決定。MYRは弱い米2月雇用統計後に一時的に買われる局面もあったが、掛かる不安材料から8日に4.0970の月間安値を付けた。

中旬は3日連続での国会決議となったブレクジット劇場を睨み、MYRも4.08—4.09水準で揉み合いに。方々原油市場では、サウジが年末までの減産延長を提案したと報じられたことから堅調に推移。ブレントは\$68ドルまで上昇し、昨年11月以来の高値を記録も、ブレクジットのハードランディングシナリオが残り続ける中で、MYRは再度4.0970の安値を15日にタッチした。

下旬にかけては、知財関連の政策方針に関する米中の不一致が4月の通商協議妥結に向けた市場の期待感を殺ぎ落しつつあった中でも、マレーシア投資開発庁発表の2018年外国直接投資認可額が特に製造業で著増していることが報道された他、国内MYR債券市場で2月の外国人投資家のネットフローが4ヶ月振りに流入転じたことも伝わる中で、MYRは4.07近辺に反発。20日の米FOMCは予想以上にハト派色が強く、且つ四半期末に向けたMYR買い需要も散見される中で、MYRは翌21日に2月の壁だった4.06をブレイクし、昨年8月以来の高値となる4.0550まで一時上昇。28日時点で4.07台で推移している。

■ 今月の見通し

4月のMYR相場は、USD高基調の休止や資本フローの改善を背景に、MYR高方向にレンジを切り下げる展開を予想する。

今月に合意が持ち越しとなった米中通商協議やEU側からの逆王手を指し返された英国ブレクジットの帰趨がMYRの不安材料として依然残るが、国内の成長率や政府財政への信頼感の回復に比べて出遅れ感のあった資本フローの改善が、MYRを支援材料となろう。米金融政策の予想以上のハト化は世界経済の減速懸念を惹起する懸念と裏腹ながら、エマージング市場には安心材料。

まず純輸出は、1月も事前予想を上回る黒字幅で着地。原油価格(北海ブレント)が足元67ドルと、今年度政府予算の想定レンジ水準を維持していることも安心材料。月に2回公表されている中銀外貨準備高も年明け以降着実に増加し続けており、自国通貨買い介入が然程行われていないとの市場の見方に繋がっている。

次に海外からの直投は、3/14に投資開発庁が2018年の認可実績が発表され、特に製造業向けで前年の2.7倍の水準に伸長しており、特に下半期のみで前年1年分の2倍に達していることが確認された。更にこの内数で、更新分を除く純新規分は前年対比5倍を超え、5月政権交代以降の海外からの信頼回復が窺われる格好となった。

更に、国内債券市場でも10年馬国債利回りが4%を割り込んだ2月には、海外投資家のネットフローが4ヶ月振りに流入に転じており、3/21には2016年11月以来で3.8%を割り込んで引けていることから、3月もこの流入基調は続いているものと見られる。また株式市場でも、3月に入り外国人の流入が目立つ展開となっている。

27日に中銀は19年成長率予測を18/11月政府予測の4.9%から4.3—4.8%に下方修正。合わせて、外貨規制の一部緩和を発表した。海外で不確定要素が残るものの、マレーシア国内では緩やかなMYR高に向かうシナリオのお膳立てが整いつつあると見たい。

■ 今月のつづやき(現地からの声)

『当地に赴任する方へのお役立ち情報』

都市の規模の割に公共交通網の整備が十分でないKLは、圧倒的な車社会。特に家族連れの日本人派遣者が多く住むモントキアラ地区にも電車の駅がなく、敷設計画があったものの過去の政権交代後に事業仕分けの対象となってしまった為、当面は通勤・通学・買い物等が車に頼り続けることとなる。また週末のレジャー等でイポーやマラッカ、ポートディクソン等の地方都市に出かける際も基本車を使用することが多い。KLからの距離が東京・名古屋間程あるベナンやシンガポールも、家族連れの旅行であれば旅行先での移動手段も兼ねて車で行くことがしばしば。筆者自身も週末のみのドライバーだが、年間走行距離は凡そ8千キロ程あるイメージ。

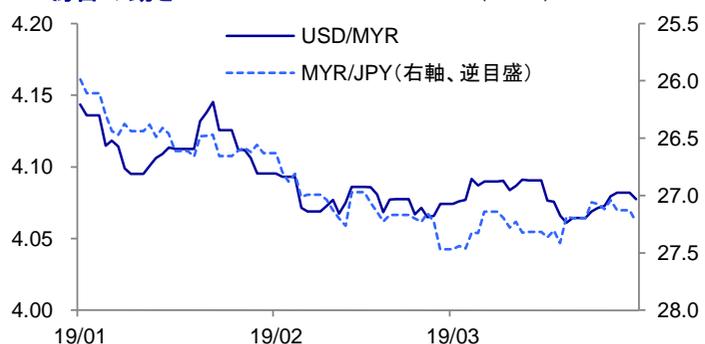
・・・ということで、赴任なさる方には是非お勧めさせて頂きたいのが、ご赴任前に「国際免許証」を取得されること。

実は筆者が赴任した2年半前は、日本の免許証を領事館で英訳して貰い、それに実物の免許証を添えて当地の免許センターに持ち込むと、当地の免許証を発行してくれていた(当時で残存有効期間1年半の日本の免許証だったが、おおらかに有効期間5年のマレーシア免許証を出して貰えた)。しかしながら昨年運用が変わり、外国人への外国免許証に基づく当地免許証の新規発行がサスペンドになり、再開日処はまだ聞こえてきていない状況。

国際免許証は毎年更新要なので手間ながら、足元他に対応方法がない事から、ご赴任が決まられたら速やかに手配されることを強くお勧め申し上げます。

■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
3/4	Trade Balance (MYR)	Jan	8.95B	11.52B	10.43B
3/4	Exports	Jan	-0.6%	3.1%	4.8%
3/4	Imports	Jan	1.2%	1.0%	1.0%
3/5	Policy Rate (OPR)	5-Mar	3.25%	3.25%	3.25%
3/7	Foreign Reserves	28-Feb	-	102.4B	102.3B
3/14	Industrial Output (y/y)	Jan	2.3%	3.2%	3.4%
3/22	CPI (y/y)	Feb	-0.3%	-0.4%	-0.7%
3/22	Foreign Reserves	15-Mar	-	102.6B	102.4B
3/27	BNM's yearly GDP forecast	Y2019	4.3-4.8% ('18/11 政府予測:4.9%)		

インドネシアルピア相場

予想レンジ:

USD/IDR 13900 ~ 14500
 IDR/JPY 0.75 ~ 0.80
 JPY/IDR 125.00 ~ 133.00

(注)100インドネシアルピアあたりの対円レート

アジア・オセアニア資金部 河合 良介

■ 先月の為替相場

3月のドル/ルピアは、14090~14340のレンジでの推移となり、上にいってこいの展開となった。

14100近辺でスタートしたドル/ルピアは、月初14100前後での推移が続いた。1日発表されたインドネシア2月消費者物価指数は、前年同月比+2.57%と予想を下回ったものの市場の反応は限定的であったが、インドネシア休日明け8日に発表された中国2月貿易統計が市場予想を大幅に下回る結果となり、アジア通貨が軟調に推移すると、ルピアも売られ、ドル/ルピアは、一時14340近辺まで上昇した。同日発表となった2月外貨準備高は1230億ドル(前月比+32億ドル増加)となった。

その後、14200~14300での推移が継続。15日発表となったインドネシア2月貿易収支は、5か月ぶりに黒字転換となった。

21日、前日の米FOMCにおいて、今年の利上げ見通しが0回に引き下げられ、FRBのハト派スタンスが示されると、ドル/ルピアは、14100近辺でのギャップオープンとなり、一時、14090近辺まで下落。

同日実施されたインドネシア中央銀行金融政策決定会合では、市場予想通り、金利据え置きとなった。

3月22日現在、ドルルピアは、14165近辺での取引となっている(終値ベース)。

■ 今月の見通し

今月のドル/ルピアは、14000~14300をコアレンジとし、ルピアが対ドルで強含みつつ方向感を探る展開を予想する。
 先月米FOMCにおいてFRBのハト派スタンスが全面に押し出されたことで、今後のドル/ルピアの見通しは難しい局面を迎えている。

為替取引に実需原則が存在するインドネシアルピアは、結局のところ、恒常的に赤字である経常収支(ルピア安要因)に対し、証券投資で、それ以上の資金流入があればルピアが対ドルで上昇もしくは安定し、資金流出が起きればルピア安に拍車をかける訳だが、

まず経常収支、特に貿易収支は、2月実績が5か月ぶりの黒字転換となったが、中身をみると、2018年第4四半期から下落を始めた原油価格の下落を受けた、石油関連製品の輸入減少に因るところが大きく、中国の景気減速を主要因とした輸出の不調という状況は不変である。
 一方の証券投資であるが、2018年第4四半期から株価好調、インドネシア国債の海外投資家保有残高は、3月20日時点で954兆ルピア(2月末時点比+12兆ルピア)に達し、インドネシア10年債利回りは7.6%近辺(3月22日現在)まで下落、旺盛な海外投資が確認されている。

今回米FRBのハト派スタンスが確認され、短期的には、海外からの資金流入が加速する可能性があるが、1年を通じて続くとは考えていない。その背景は、①中国の景気減速が確認されていること、②インドネシアの貿易収支の状況は依然不安定であること③世界的な景気減速が確認されれば、リスクオフから、海外投資家の資金流入が止まり、最悪のケースでは資金流出の可能性もあること、である。

以上より、短期的にはルピアは、米FRBのハト派スタンスに支えられ、強含む展開を予想するが、年を通じてのルピア安予想は不変。

4月17日に予定されるインドネシア大統領選挙戦は、接線化が報道されているが、ジョコ候補再選がメインシナリオ。同氏敗北は政治不安からルピア安要因となる点に注意しておきたい。

■ 今月のつぶやき(現地からの声)

『当地に赴任する方へのお役立ち情報』

海外赴任となりますと、どの国に行くにしても、日本食レストランはあるのか? 医療事情は? 等々心配になります。

各国共通の事項は、他の通貨担当の寄稿者にお任せするとして、特にインドネシアでは、お酒事情が良くないことです。(そう感じるのは、自分が愛飲者だからか、、、)

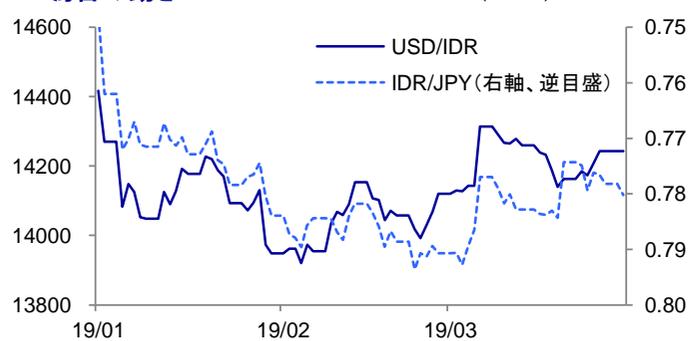
この状況は、これからご赴任されるご自身もそうですか、受け入れる側は、赴任期間中、そのストレスと戦っている訳です。

赴任直後は歓迎会等も多いでしょう。1人1リットルまで許容されている酒類の持ち込み。

ここは、ケチらず、珍しい日本酒や焼酎を持ち込み、歓迎会でヒーローになることを強くお奨めします。

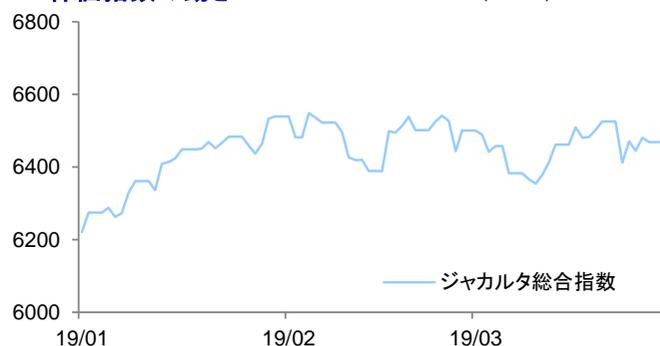
■ 為替の動き

(資料)ブルームバーグ



■ 株価指数の動き

(資料)ブルームバーグ



■ 先月の注目イベント

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
3/1	CPI(前年同月比)	2月	2.75%	2.57%	2.82%
3/8	外貨準備高(USD B)	2月	-	123.3	120.1
3/15	輸出(前年比)	2月	-4.40%	-11.33%	-4.30%
3/15	貿易収支(USD M)	2月	-782	330	-1,064
3/21	BI 7daysリパースレポ金利		6.00%	6.00%	6.00%

(資料)ブルームバーグ

フィリピンペソ相場

予想レンジ: USD/PHP 52.00 ~ 53.30
 PHP/JPY 2.06 ~ 2.120

アジア・オセアニア資金部 マニラ室 樋上 陽一

■ 先月の為替相場

3月のドルペソ為替相場は米中貿易摩擦に関わる楽観的な見方が市場を支配し、昨年12月21日より続いた1米ドル=52ペソ台(終値ベース)を下抜けし、1米ドル=51.86ペソで取引開始。
 4日には1米ドル=51.68ペソで取引される場面も。一方、米中貿易摩擦緩和の材料が新鮮味を欠いたのも事実で、ドルの下値は底固くこれが月中のペソ高値となった。
 5日にペソは急落。比2月消費者物価が前年比+3.8%と市場予想の同+4%を下回ったことに加え、次期フィリピン中銀総裁にジョクノ氏が指名されたことが材料視された。ジョクノ氏は経済成長重視スタンス、今後の金融政策に対するハト派な思惑が台頭し、ドルペソ為替相場は1米ドル=52ペソ台に持ち上げられた。
 8日の海外時間に発表された米2月雇用統計を受けて米金利は低下、為替市場はドル売りで反応。週明けのアジア通貨は強含みとなり、英国のEU離脱に関する不透明感後退もアジア通貨のサポート材料となったが、ドルペソ為替相場は再びペソ安が大きく進むことに。
 背景にあったのはジョクノ中銀新総裁が、民間金融機関が預金総額に対して中銀に積み立てる準備預金比率を段階的に引き下げるとコメントしたこと。ペソの流動性が市場に供給されることからペソは売られ、20日には1月中旬以来のペソ安水準である1米ドル=52.95ペソで一時取引された。
 その後、20日のFOMCで米ドルの金融政策に対するハト派スタンスが強まり、21日のフィリピン中銀金融政策委員会では期待されていた預金準備率の引き下げが見送られたことで相場は一転。22日にペソは急騰し、1米ドル=52.32ペソで越週。
 3月最終週はドル強含み推移。22日の海外時間に世界経済の減速懸念で、米債の長短金利が逆転したことやNYダウ平均株価が約460ドルもの値下がりとなったことで安全資産のドル買いが優勢に。3月27日現在、1米ドル=52.50~60ペソ台での取引。

■ 今月の見通し

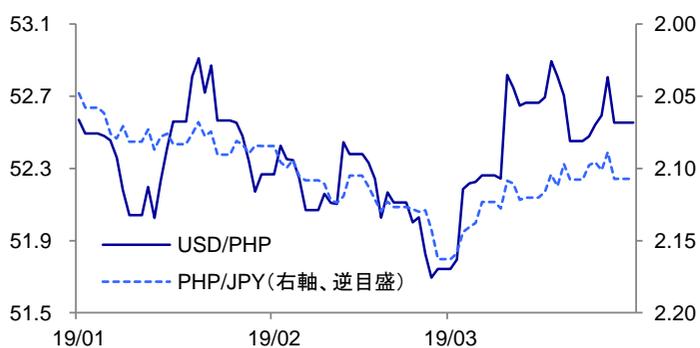
3月のドルペソ為替相場は月初から一時2.1%超ペソ安になる場面もみられた。今月はペソ安への一服感や過度な相場変動を懸念する当局の動きに市場は神経質になりそうだ。米国の利上げ休止姿勢を鮮明にする中、米金利動向からみればドルの上値は重そう。

しかしながら対ドルでのペソ安懸念は根強い。ファンダメンタルにおいては、中国の経済成長率に勢いがなくなってきたことや世界景気の減速は明白。米中貿易摩擦の高まりによる世界的な貿易停滞は日々リスクとして高まっている。
 フィリピン中銀は先月21日の金融政策委員会で翌日物借入金金利(RRP)を4.75%、翌日物貸出金利(OLF)を5.25%、翌日物預金金利(ODF)を4.25%にそれぞれ据え置いた。
 据え置きは3会合連続となり、ギングンド副総裁は会見で、「政策金利は主に物価統制のために変動させており、現行の金利が適切」、「インフレは落ち着いており、今年と来年のインフレ率は政府目標である2.0~4.0%の範囲内に収まる見込み」とコメント。
 また、米連邦準備制度理事会(FRB)が当面は政策金利を据え置く見通しのため、ペソ相場が大きく変動する懸念も薄いとの見方を示した。

中銀の最新インフレ見通しは2019年、2020年ともに3%。インフレ懸念後退はこれまでペソ高材料であったが、次の一手が金融緩和であると市場はみており、ペソ安圧力が今後は継続するとみる。
 米中貿易協議やBREXIT交渉の楽観的な見方はすでに織り込み済みで、ネガティブ報道に大きく反応するのは。市場がリスクオフ相場となる可能性が強い。
 (3月27日現在)

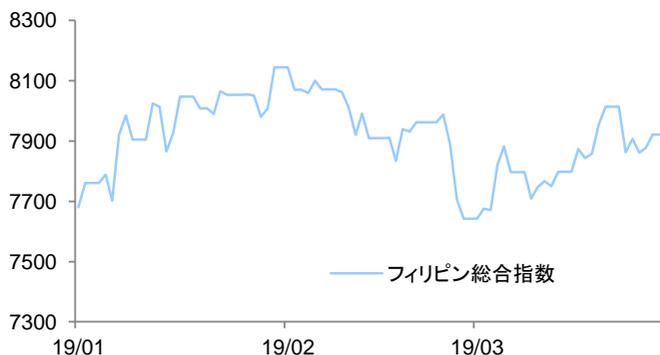
■ 為替の動き

(資料)ブルームバーグ



■ 株価指数の動き

(資料)ブルームバーグ



■ 先月の注目イベント

発表日 イベント
 上記参照

(資料)ブルームバーグ

期間	予想	結果	前回
----	----	----	----

インドルピー相場

予想レンジ: USD/INR 67.50 ~ 72.50
INR/JPY 1.57 ~ 1.65

アジア・オセアニア資金部 インド室 田川 順也

■ 先月の為替相場

【3月の米ドル/インドルピーは上値を切り下げ続ける展開だった】

70.85で3月取引を開始。インド中央銀行が外国人投資家に対する国債・地方債関連の規制を変更、またモディ政権への期待、4月会合での政策金利下げを予想した株式市場への外国人投資家の資金流入が続く中、企業買収絡みの超大口ルピー買いも噂され、ルピーが強含む展開。5日にはドル/ルピーは2か月ぶりの安値をつける。その後も昨年2月以降下回ったことがなかった200日移動平均線を明確に割りこみ、8日には70.00を下回る。続いて米2月CPIの結果が市場予想を下回ったことを背景としたドル売りや、英首相が3月29日に予定されている離脱期限の2か月間延長を求めるとの報道にリスク選好ムードとなり、ルピーが買われる展開。

またインド2月貿易収支が発表されると事前予想比赤字額が大幅に少ない結果に一段とルピーが買われる展開。ドル/ルピーは昨年8月1日以来となる68.35まで下落。ただしその後は、利益確定のドル/ルピーの買戻しや実需勢のドル買いも入り一旦は反発を見せる。68.83で20日の引けを迎えた。単日では大きな動きこそなかったものの、月初から下落圧力が続き、じわじわと水準を切り下げ続ける展開だった。

【3月のインドルピー/日本円は水準を切り上げた】

1.57レベルで当月オープンを迎えたルピー/円は1日のオープンレベルが当月の安値に。ドル/円は一時112円台をつける動きも見せたが、同レベルでは途端に重くなり、111円台に押し戻される様相。強弱入り混じる米経済指標や右往左往するイギリスの欧州離脱関連トピックに方向感を見いだせず、111円-112円の間でドル/円はこう着。

ドル/円が動きづらい展開の中、ドル/ルピーが上述のように上値を切り下げ続けたことからルピー/円ではルピー高・円安の展開。ドル/ルピーが安値をつけた18日と同タイミングでルピー/円は当月の高値である1.629を示現。1.62レベルで20日取引を終えた。

■ 今月の見通し

【4月の米ドル/インドルピーは上値の重い展開を予想】

非居住者の投資資金のインフローが著しく、株式・債券の売り買いをネットすると3月は19日までで合計4,192百万米ドルの買い越しとなっている。この金額は2017年6月以来の大きさである。海外投資家のインド株式や債券の買いは為替市場にてルピー買い/外貨売りが付随するため、これがルピー高の一因になっている。

また4月はインド中央銀行の政策会合が予定されている(発表日は4日)。先月の本欄でも触れたように、中銀の動きはインド実体経済を反映したものというよりも、選挙を控えた政府の得票対策のような動き方も見て取れ、住宅価格や設備稼働率の上昇を裏腹に利下げ期待が高まっている。政策金利の引き下げは為替単体で考えると、自国通貨安方向の要因となるが、現状のインドは大きな景気減速感が見られるわけではない中、利下げによる株高が材料視され、既述の海外からの資金流入につながっており、それがルピー高を招くという構造になっている。

また、実需については破産法が適用されたインド大手企業を欧州企業が買収。買収資金を手当てするために巨額のルピー買いをしているとのうわさが聞かれている。

米国要因では20日のFOMCにて声明文冒頭で「経済活動の伸びは鈍化」と記載するとともに従前2回となっていた2019年の利上げ回数予想の中心値が0回まで下方修正された。これを受けドル安、米金利は一年ぶり水準まで低下している。昨年度のアジア通貨安(含むルピー)の根底となった要因は米金利上昇であったことを考えると、昨年とは逆の資金流、つまり米→新興国という動きがある程度出ることが自然ではないだろうか。

くすぶり続ける英国の欧州離脱については一旦離脱期限を延長し、クリンチ姿勢をとることが想定され、今月は大きなリスクオフ材料として取り上げられる可能性は低いように思える。

上記の材料からドル/ルピーは下落方向に備えたいが、昨年10月の高値74.48から3月は68.35を割るところまで9%近く下落している。急激な為替変動を嫌うインド中銀によるドル買い為替介入が強く入り、ドル/ルピーの下落フローが相殺される場面も想定され、4月の予想は「下落」というよりも「現状水準で上値が重い」という表現を使いたい。

■ 今月のつづやき(現地からの声)

『当地に赴任する方へのお役立ち情報』

国土の広いインドでは、地域によって全く異なりますが、代表的な必需品としては、マスクや日本の食材などでしょうか。ですが実際にこちらで生活してみてもおすすめしたいのはアンガーマネジメント力です。

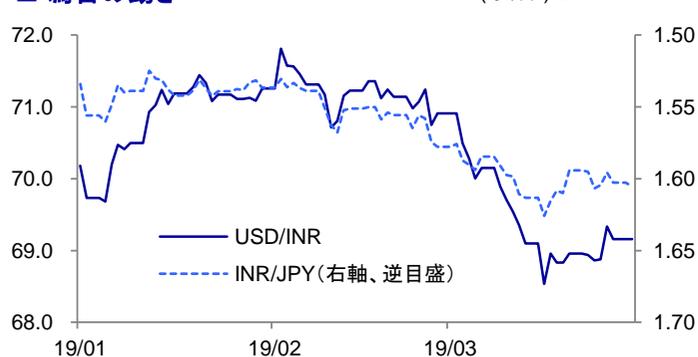
時間にルーズな事で有名なインド人ですが、彼等の“2Min”は1時間、“1Hour”は明日、“Tomorrow”は早くて来週、下手すると永遠に来ないと思ってしまう程。その他にも列の割り込みは当たり前。注文したものが出ない(3回頼めば出てきます)。プリントアウトしたものがプリンターから消える(誰かが持っていってしまう又は印刷をキャンセルされる)など。一日に何度もイライラの要素に出会う為、毎回それに苛立ってしまうと、こちらの身が持ちません。あまりにも日本と違うため、赴任前に予防接種を受ける感覚でアンガーマネジメント力を鍛える講習や書籍などに目を通していただくと良いのではと思います。

日本人は「なるべく人に迷惑をかけるはいけない」という感覚の方が多くと思いますが、インド人は「人に迷惑をかけているのだから、人のことも許してあげなさい」です。なんて寛大なのでしょうか。実際に私の同僚達も全員ではありませんがその様な人が多いです。怒りのピークは6秒間なのだから(私の場合はもっと長いように感じますが)。なので「怒りを感じたらまずは6秒間やり過ごす」よう意識していただければと存じます。

インド人はとても陽気でおしゃべり好きな人が殆どです。皆さまが楽しくお仕事をさせていただけますよう、ご参考頂きますと幸いです。(ニューデリー支店 市野瑞穂)

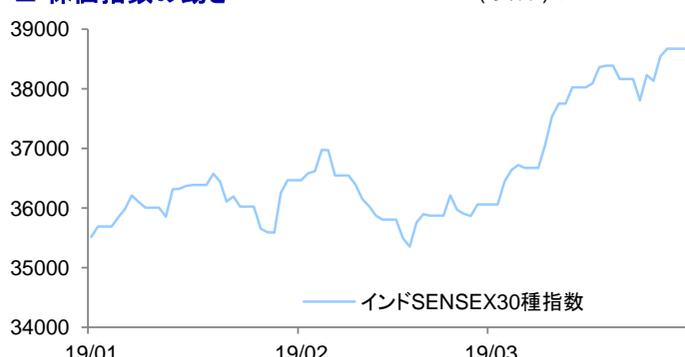
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

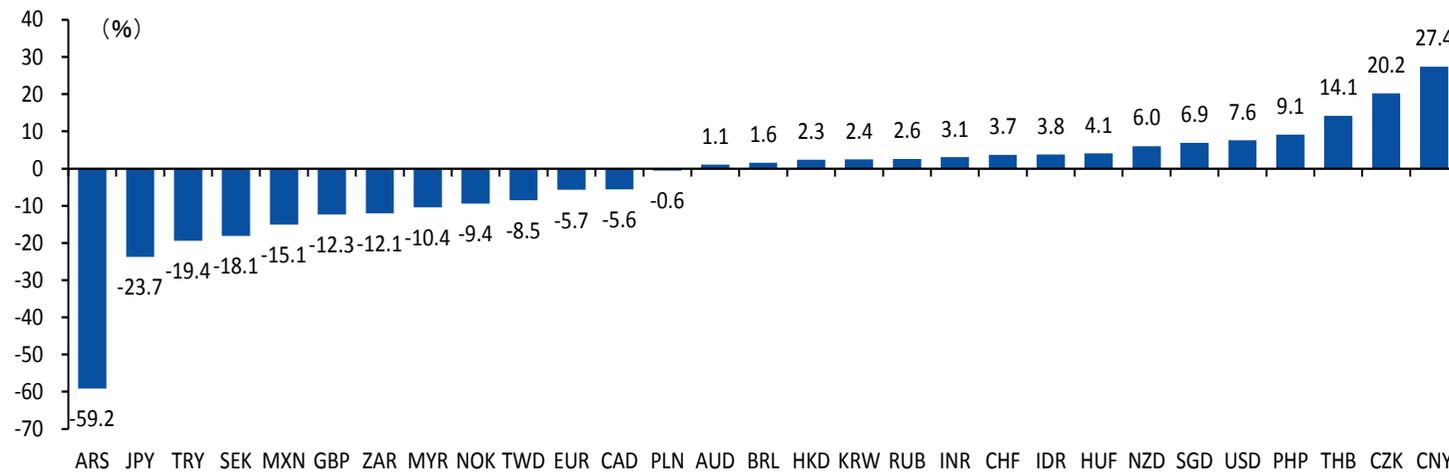
発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
3/1	製造業PMI	2月	-	54.3	53.9
3/12	CPI	2月	2.40%	2.57%	1.97%
3/12	鉱工業生産	1月	2.1%	1.7%	2.6%
3/15	貿易収支	2月	▲137億ドル	▲95億ドル	▲147億ドル

■ 為替市場・株式市場騰落率

	為替市場	2018年末	2019年3月末	騰落率	株式市場	2018年末	2019年3月末	騰落率	USD換算
先進国									
米国	-	-	-	-	NYダウ平均	23327.46	25928.68	11.2%	-
日本	USD/JPY	109.69	110.86	1.1%	日経平均株価	20014.77	21205.81	6.0%	4.8%
ユーロ圏	EUR/USD	1.1467	1.1218	-2.2%	ドイツDAX指数	10558.96	11526.04	9.2%	9.2%
英国	GBP/USD	1.2754	1.3035	2.2%	ロンドンFTSE100指数	6728.13	7279.19	8.2%	5.9%
豪州	AUD/USD	0.7049	0.7096	0.7%	S&P/ASX200指数	5646.4	6180.731	9.5%	8.7%
カナダ	USD/CAD	1.3637	1.3349	-2.1%	S&Pトント総合指数	14322.86	16102.09	12.4%	14.8%
エマージングアジア									
中国	USD/CNY	6.8785	6.7121	-2.4%	上海総合	2493.896	3090.758	23.9%	27.0%
香港	USD/HKD	7.8319	7.85	0.2%	香港ハンセン	25845.7	29051.36	12.4%	12.1%
インド	USD/INR	69.7675	69.1612	-0.9%	インドSENSEX30種	36068.33	38672.91	7.2%	8.2%
インドネシア	USD/IDR	14390	14243	-1.0%	ジャカルタ総合	6194.498	6468.755	4.4%	5.5%
韓国	USD/KRW	1110.95	1135.18	2.2%	韓国総合株価	2041.04	2140.67	4.9%	2.6%
マレーシア	USD/MYR	4.1335	4.082	-1.2%	ブルサマレーシアKLCI	1690.58	1643.63	-2.8%	-1.6%
フィリピン	USD/PHP	52.556	52.554	0.0%	フィリピン総合	7466.02	7920.93	6.1%	6.1%
シンガポール	USD/SGD	1.3629	1.3557	-0.5%	シンガポールST	3068.76	3212.88	4.7%	5.3%
台湾	USD/TWD	30.549	30.826	0.9%	台湾加権	9727.41	10641.04	9.4%	8.4%
タイ	USD/THB	32.327	31.737	-1.8%	タイSET	1563.88	1638.65	4.8%	6.7%

(資料)ブルームバーグ、みずほ銀行

■ 実質実効為替レート(REER)の1994年以降の平均からの乖離(2019年2月時点)



■ 実質GDP成長率

	2017Q2	2017Q3	2017Q4	2018Q1	2018Q2	2018Q3	2018Q4	2017	2018
	(前年比%、*前期比年率%)							(前年比%)	
先進国									
米国*	3.0	2.8	2.3	2.2	4.2	3.4	2.2	2.2	2.9
日本*	1.8	2.5	1.6	-0.4	1.9	-2.4	1.9	1.9	0.8
ユーロ圏	2.5	2.8	2.7	2.4	2.1	1.6	1.1	2.4	1.8
英国	1.9	2.0	1.6	1.2	1.4	1.6	1.4	1.8	1.4
豪州	2.1	2.8	2.4	3.1	3.1	2.7	2.3	2.4	2.8
カナダ*	4.4	1.3	1.7	1.3	2.6	2.0	0.4	3.0	1.8
エマージングアジア									
中国	6.8	6.7	6.7	6.8	6.7	6.5	6.4	6.8	6.6
香港	4.0	3.6	3.5	4.6	3.5	2.8	1.3	3.8	3.0
インド	6.0	6.8	7.7	7.7	8.0	7.0	6.6	7.1	7.2
インドネシア	5.0	5.1	5.2	5.1	5.3	5.2	5.2	5.1	5.2
韓国	2.8	3.8	2.8	2.8	2.8	2.0	3.1	3.1	2.7
マレーシア	5.8	6.2	5.9	5.4	4.5	4.4	4.7	5.9	4.7
フィリピン	6.6	7.2	6.5	6.6	6.2	6.0	6.1	6.7	6.2
シンガポール	3.1	5.1	3.7	4.7	4.2	2.4	1.9	3.9	3.3
台湾	2.5	3.4	3.5	3.2	3.3	2.4	1.8	3.1	2.6
タイ	4.2	4.5	3.9	5.0	4.7	3.2	3.7	4.0	4.1

(注)インドの年間成長率は会計年度(4~3月)。

(資料)ブルームバーグ、みずほ銀行

■ 消費者物価上昇率

	18/07	18/08	18/09	18/10	18/11	18/12	19/01	19/02	2017	2018
	(前年比%)								(前年比%)	
先進国										
米国	2.9	2.7	2.3	2.5	2.2	1.9	1.6	1.5	2.1	2.4
日本	0.9	1.3	1.2	1.4	0.8	0.3	0.2	0.2	0.5	1.0
ユーロ圏	2.2	2.1	2.1	2.3	1.9	1.5	1.4	1.5	1.5	1.8
英国	2.5	2.7	2.4	2.4	2.3	2.1	1.8	1.9	2.7	2.5
豪州			1.9			1.8			1.9	1.9
カナダ	3.0	2.8	2.2	2.4	1.7	2.0	1.4	1.5	1.6	2.3
エマージングアジア										
中国	2.1	2.3	2.5	2.5	2.2	1.9	1.7	1.5	1.6	2.1
香港	2.4	2.3	2.7	2.7	2.6	2.5	2.4	2.1	1.5	2.4
インド	4.2	3.7	3.7	3.4	2.3	2.1	2.0	2.6	3.3	4.0
インドネシア	3.2	3.2	2.9	3.2	3.2	3.1	2.8	2.6	3.8	3.2
韓国	1.1	1.4	2.1	2.0	2.0	1.3	0.8	0.5	1.9	1.3
マレーシア	0.9	0.2	0.3	0.6	0.2	0.2	-0.7	-0.4	3.9	1.0
フィリピン	5.7	6.4	6.7	6.7	6.0	5.1	4.4	3.8	3.2	5.1
シンガポール	0.6	0.7	0.7	0.7	0.3	0.5	0.4	0.5	0.6	0.4
台湾	1.8	1.5	1.7	1.2	0.3	-0.1	0.2	0.2	0.6	1.4
タイ	1.5	1.6	1.3	1.2	0.9	0.4	0.3	0.7	0.7	1.1

(注)豪州は四半期データ。

(資料)ブルームバーグ、みずほ銀行

■ 失業率

	18/07	18/08	18/09	18/10	18/11	18/12	19/01	19/02	2017	2018
	(%)								(%)	
先進国										
米国	3.9	3.8	3.7	3.8	3.7	3.9	4.0	3.8	4.4	3.9
日本	2.5	2.4	2.4	2.4	2.5	2.4	2.5	2.3	2.8	2.4
ユーロ圏	8.1	8.0	8.0	8.0	7.9	7.8	7.8		9.1	8.2
英国	4.0	4.0	4.1	4.1	4.0	4.0	3.9		4.4	4.1
豪州	5.3	5.3	5.0	5.0	5.1	5.0	5.0	4.9	5.6	5.3
カナダ	5.9	6.0	5.8	5.7	5.6	5.6	5.8	5.8	6.3	5.8
エマージングアジア										
中国			3.8			3.8			3.9	3.8
香港	2.8	2.8	2.8	2.8	2.8	2.8	2.8	2.8	3.2	2.8
インドネシア		5.3							5.4	5.2
韓国	3.8	4.1	4.0	3.9	3.8	3.8	4.4	3.7	3.7	3.8
マレーシア	3.4	3.4	3.3	3.3	3.3	3.3	3.3		3.4	3.3
フィリピン	5.4			5.1			5.2		5.7	5.3
シンガポール			2.1			2.2			2.2	2.1
台湾	3.7	3.7	3.7	3.7	3.7	3.7	3.7	3.7	3.8	3.7
タイ	1.0	1.0	1.0	1.0	1.0	0.9	1.0	0.8	1.2	1.1

(資料)ブルームバーグ、みずほ銀行

■ 経常収支

	2017Q2	2017Q3	2017Q4	2018Q1	2018Q2	2018Q3	2018Q4	2017	2018
	(対GDP比%)							(対GDP比%)	
先進国									
米国	-2.3	-2.3	-2.3	-2.3	-2.2	-2.3	-2.3	-2.3	-2.4
日本	3.9	4.0	4.0	4.0	4.0	3.8	3.5	4.0	3.5
ユーロ圏	3.0	3.1	3.2	3.4	3.6	3.3	3.0	3.2	3.0
英国	-4.3	-3.6	-3.3	-3.4	-3.2	-3.5	-3.9	-3.3	-3.9
豪州	-2.4	-2.8	-3.4	-2.3	-2.5	-2.3	-1.5	-2.6	-2.2
カナダ	-2.6	-2.6	-2.8	-3.0	-3.0	-2.7	-2.7	-2.8	-2.7
エマージングアジア									
中国	1.4	1.0	1.3	0.9	0.5	0.4	0.4	1.4	0.4
香港	4.1	4.8	4.7	4.4	4.1	3.6	4.3	4.7	4.3
インド	-1.3	-1.4	-1.5	-1.9	-1.9	-2.3	-2.4	-1.5	-2.4
インドネシア	-1.4	-1.3	-1.6	-1.9	-2.3	-2.8	-3.0	-1.6	-3.0
韓国	5.1	5.3	4.9	4.5	4.6	4.7	4.7	4.9	4.7
マレーシア	2.6	3.0	3.1	3.7	3.3	2.6	2.3	3.1	2.3
フィリピン	-0.5	-0.1	-0.8	-0.6	-1.7	-2.7	-2.4	-0.8	-2.4
シンガポール	18.1	16.9	16.0	16.0	16.9	17.5	17.7	16.0	17.7
台湾	12.9	13.6	14.3	14.3	14.0	12.7	11.6	14.3	11.6
タイ	10.6	11.0	11.0	10.7	10.4	8.1	6.9	6.9	

(注)インドの年間経常収支は会計年度(4~3月)。

(資料)ブルームバーグ、みずほ銀行

■ 世界の政策金利

		現在 (%)	政策転換期		最近の政策変更		直近の政策動向	
			日付	水準 (%)	日付	(単位:bp)	日付	決定事項
先進国								
米国	FFレート誘導目標	2.25-2.50	引き締め: 2015/12/17	0.25 - 0.50	2018/12/19	+25	2019/3/20	現状維持
日本	無担保コール翌日物金利	0.10	緩和: 2008/10/30	0.50	2010/10/5	0-10	2019/3/15	現状維持
ユーロ圏	主要リファイナンスオペ金利	0.00	緩和: 2011/11/3	1.50	2016/3/10	-5	2019/3/7	現状維持
英国	バンク・レート	0.75	引き締め: 2017/11/2	0.25	2018/8/2	+25	2019/3/21	現状維持
豪州	キャッシュ・レート	1.50	緩和: 2011/11/1	4.75	2015/8/2	-25	2019/3/5	現状維持
カナダ	翌日物金利	1.75	引き締め: 2017/7/12	0.50	2018/10/24	+25	2019/3/6	現状維持
エマージングアジア								
中国	1年物貸出基準金利	4.35	緩和: 2012/6/8	6.31	2015/8/25	-25	2015/10/23	-25bp
インド	翌日物レポ金利	6.25	緩和: 2019/2/7	6.50	2019/2/7	-25	2019/2/7	-25bp
インドネシア	7日物リバースレポレート	6.00	引き締め: 2018/5/17	4.25	2018/11/15	+25	2019/3/21	現状維持
韓国	7日物レポ金利	1.75	引き締め: 2017/11/30	1.25	2018/11/30	+25	2019/2/28	現状維持
マレーシア	翌日物金利	3.25	引き締め: 2018/1/23	3.00	2018/1/23	+25	2019/3/5	現状維持
フィリピン	翌日物金利	4.75	引き締め: 2018/5/10	3.00	2018/11/15	+25	2019/3/21	現状維持
タイ	翌日物レポ金利	1.75	引き締め: 2018/12/19	1.50	2018/12/19	+25	2019/3/20	現状維持
ベトナム	リファイナンス金利	6.25	緩和: 2012/3/12	15.00	2017/7/7	-25	2017/7/7	-25bp

(注) インドネシア中銀は2016年8月19日に政策金利をBIレートから7日物リバースレポレートに変更

(資料) ブルームバーグ、みずほ銀行